

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	上野 栄一
1. 教育の責任			
<p>担当科目 学部 : 精神看護学特論、保健医療学概論、チーム医療論、チーム医療論演習、カウンセリング論、精神看護学実習 大学院: 精神看護学特論Ⅰ、精神看護学特論Ⅱ、精神看護学特論Ⅲ、精神看護特論Ⅳ、コンサルテーション論、急性期精神看護学特論、精神看護学演習Ⅰ、精神看護学演習Ⅱ、精神看護学実習アセスメント、精神看護専門看護師役割実習、直接ケア実習、上級直接ケア実習</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>本学の示す「高度な専門学術知識に裏付けられた、実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」という本学の建学の精神」と保健医療学部の「幅広い教養と豊かな人間性、国際性、変化に対応できる汎用的能力を備え、「人」を中心に据えた専門的知識と高度な技術、創造力、実践力、倫理性、協調性を身につけた「保健医療従事者」の育成、を目指しています。」とあるように、想像力、実践力、倫理性、協調性を大切にしながら、個人、集団、地域に貢献できる保健医療の専門職を目指す教育を目指す。また、アドミッションポリシーにある、「人と自然を愛する心を持ち、看護職に興味・関心のある人。また、確かな基礎的学力を有し、看護職者に必要な知識・技術を積極的に学び、地域社会、国際社会に貢献する意欲のある人」を目指すために、基礎から応用力を身に着けるとともに理解から実践できる能力を身に着けさせる。</p>			
3. 教育の方法			
<p>新型コロナウイルス感染症の拡大の中、オンライン授業中心になることが予想される。このような医療情勢、社会情勢の中、感染防止と面接授業・対面授業の効果的実施等による学修機会の確保をつとめ、質の高い教育を確保する。そのためには、授業内容について、わかりやすい教材作りをするとともに、図表を多くもちいることで、理解力を高める工夫をしたい。教育の方法の基本は、CPであり、1.) 広く豊かな社会的常識をもち、人間の社会的に成熟した人を育てる教育、2) 教育に対する使命感と情熱をもち、子どもと教育的な関係を築く力をつける教育、3) 教育の専門家として各教科の内容及び指導法を実践的に深める教育、4) 個々の子どもを理解し一人一人を生かすとともに集団を指導する力を身につける教育、5) 自己教育力を持ち、セルフマネジメント能力と生涯学習能力を身につける教育、6) 学校内外の人々と連携しチームとして活動できる力を身につける教育、7) 日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につける教育を目指す。</p> <p>また、予習復習についてポイントを説明しながら進める。さらに、学修効果を上げるために、学習ノートの作成は毎回作成するように工夫をするとともに学修意欲を向上させるための支援や主体的に学ぶ意欲を向上させるための視覚教材の工夫をする。さらに学修相談など双方向の学生とのコミュニケーションを円滑にするために、Active Academyを有効に活用し、学生との授業内容についての質疑応答を活用する。。</p>			
4. 教育の成果			
<p>前期の授業では、コロナ感染症の拡大による授業の対面授業については、zoom授業と組み合わせながらの授業展開をしてきた。学修効果としての評価は、是認合格であり、授業で工夫してきた学修ノート作成、レポート課題の提出などの効果はあったと考える。今後も新型コロナウイルス感染症は拡大蔓延傾向にあるため、一人一人の学修状況を鑑みながら支援したい。</p>			
5. 今後の目標			
<p>新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う授業は、オンラインが中心となることが予想される。オンライン授業を円滑に進めていくために、新カリキュラムの教育内容を遵守しながら、奈良学園大学の特性を生かした教育を展開していくことが目標となる。学生にhあ、社会の変化により刻々と変化する保健医療ニーズに対応できるように、知識と技術（実践力）を高め続ける意欲向上させる学修支援をする。</p>			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）</p>			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科
氏名	阪元 勇輝
1. 教育の責任	
<p>担当している講義科目は、保健医療学部および人間教育学部において、共通教育科目である「環境化学の基礎」および「生活と環境」である。</p> <p>将来、主として医療分野や教育分野に従事することを目指している学生に対して、化学の基礎、環境問題および災害問題に関する基本的な事項からより実践的な事項まで、身近な問題としてとらえることができるような授業を展開し、これらの問題に対してどの様に対処し、行動すべきなのかについて修得できる教育を担当している。</p> <p>担当科目の概要は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none">・「環境化学の基礎」では、日常生活に関わる化学物質・化学反応やそれらに起因する環境問題について、それらのメカニズムや人体・社会・環境への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させ、自然環境を守るための方策を考えることができることを目指している。・「生活と環境」では、日常生活に関わる環境問題や自然災害について、それらのメカニズムや人体・社会への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させるための方策を考えることができることを目指している。	
2. 教育の理念・目的	
<p>教育の理念・目的として、重要視していることは、主として、「自主的な学習」、「問題発見能力」および「問題解決能力」であり、それぞれの項目に対し、興味を持つように、また興味に対して論理的な考え方や展開ができるような教育を目指している。</p> <p>上記3点に関して、以下の様に考えている。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 「自主学習能力」：学術や技術などに常に探求心をもって自らが習得できる力の育成多面的な視点を持ち、常に自分の頭で考える思考性向の育成2) 「問題発見能力」：上記1)の能力の育成することにより、自ずと様々な疑問点等が生じることとなり、必然的にそれらが課題や問題点となる。常に疑問点や問題を持ち続けることによる問題発見能力の育成3) 「問題解決能力」：上記1)および2)の能力を育成することにより、その中から自らが興味を持つ疑問点や課題を問題点として捉え、それらの問題点等に対して、自らによる論理的な思考やアプローチにより問題解決する能力の育成	
3. 教育の方法	
<p>上述の教育理念に基づき、担当講義に関する基本的な知識および理論等の興味や理解を深めるために、できるだけ身近な問題や事象としてとらえることができるように、具体的かつ日常的な多くの事例と関連づけて解説することを目指している。また、他の関連する専門科目の基礎となる、あるいは他の専門科目に応用ができよう知識や理論等を関連付けて解説するよう務めている。</p> <p>上記に関して、以下の様に考えて講義を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の進行：教科書や資料の文字や図だけでは理解しにくい専門的な内容について、独自に作成した資料等により実例、実写、動画などを用いながら可能な限りわかりやすく伝える。・授業時間外での学習：講義時において、その講義時に自らが興味を持った内容、あるいは疑問に感じた内容に関して、その理由や自らとの関連性を問う様な課題を課している。・テスト（成績評価）：自らの興味や疑問点を掘り下げ学習する自主学習能力を育成することを目的とし、自らが選択したテーマ（疑問や問題点等）に関して、選択した理由や自らとの関連性およびその問題点等に関する自らの対応策を記述させる論述式の試験を課している。	
4. 教育の成果	
<p>COVID-19の影響により、共通教育に関しては、オンデマンドでのみ講義（非対面講義）を実施しているため、正確な評価はできないが、アンケートによると、「自分で調べて文を構成するので文章力が高められるところ。」、「教科書を使うだけではなく、自分の意見や考えを述べることで考えやすかった。」、「対面で授業を行うことはできませんでしたが、講義資料などが分かりやすく講義に取り組みやすかったです。」、「自分で資料を読んでそれについて書く際に自分でも調べて書くようにするといろいろなことを知識として吸収できました」等の肯定的なコメントがほとんどであるが、一方で、ごく少数ではあるが、オンデマンドのため「質問がしづらい」等のコメントもあり（質問は随時メール等にて受け付けている。）、今後、対面講義も含めて、講義形式の模索を行っていく必要があると考えている。</p>	

5. 今後の目標

1) 短期的な目標

1. 身近な問題としてとらえることができるような事例・実例の導入
2. 授業時間外により自主的に学習するような課題や目標の設定
3. より理解しやすい、講義・学習ツール（画像、動画等）の発掘

2) 長期的な目標

1. 学生のレベルに沿ったテキストの発掘、あるいは開発
2. 助言のみで、学生が自主的に学習する環境づくり
3. 最新の知見を講義に取り入れる

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	西蘭 貞子
1. 教育の責任			
<p>担当科目 (2021年) 下線付きは単独担当科目 各学年上段は前期担当科目、下段は後期担当科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生担当科目：看護学概論、保健医療概論、看護コミュニケーション、看護倫理、基礎看護学実習Ⅰ 基礎看護技術Ⅰ ・2年生担当科目：ヘルスアセスメント、基礎看護技術Ⅱ、 看護過程論、基礎看護学実習Ⅱ ・4年生担当科目：看護研究1、看護管理、家族看護学、感染看護、統合実習 看護研究2、看護教育学 <p>各種学生支援 アドバイザーとして、1年から4年までの16名の学生の学習生活支援</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>自らの教育理念・目的</p> <p>学生は将来を担う人材であること、大学の使命は、主体的に未来を拓く人材を育成すること。 大学における教員の役割は、主体的に社会を開く力を蓄えられるよう学生の成長を支えること、土台となること。 学生の成長を実感できることが教員としての私の喜びである。</p>			
3. 教育の方法			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生とのかかわり 学生の意見は否定せず、常に耳を傾ける。否定的な意見があれば、その背景にある思いまで辿り、疑問や懷疑はそのままにしないように努めている。 ・授業の工夫 全ての担当授業で、毎回の授業後に「学びの振り返り」として、5行程度のコメント記入を求めている。各単元の学びを自分の言葉で表現することを狙うと共に疑問に思う事柄についても自由記載をもとめている。これらのコメント内容は次回の授業に反映して、理解の共有を図っている。また、看護過程論ではディープアクティブラーニングであるIBL学習法（課題発見・課題解決学習）を活用して、臨床場面で必要となる力の強化を図っている。この探究型学習の根幹となる課題発見力の育成については、担当科目で仕掛けを工夫している。 ・SD・FD参加 本学で開催された研修会は全て参加している。また、看護学科のFD研修の企画にも参画している 			
4. 教育の成果			
<ul style="list-style-type: none"> ・教育成果 前述の通り、授業ごとのコメント内容の変化や、授業の進度に応じた学生の反応から学生の成長を実感している。 演習や実習では、教員間連携も教育効果と連動するため、教員間での目標共有を密に図りながら進めた結果、学生の達成感と教員の一定の充実感を感じることができている。 			
5. 今後の目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の能力向上には、戦略的な関わりが必要と感じている。領域の教員連携だけでなく、領域間、学科、学部の教員が、本学の学生をどのように育成し、どのような能力獲得を目指しているのか、このような目的共有を図る活発な活動を希望する。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等） 			

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科
氏名	服部 律子
1. 教育の責任	
<p>1. 令和3年度は以下の授業を担当し、学部生（看護学科）と大学院生の教育を行なっている。</p> <p>（2年次生）母性看護学概論、母性看護援助論</p> <p>（3年次生）母性看護援助論演習、母性看護学実習、助産学概論、ウィメンズヘルス学、助産診断・技術学Ⅰ、助産診断・技術学Ⅱ、助産診断・技術学演習Ⅰ</p> <p>（4年次生）卒業研究Ⅱ、助産管理論、地域母子保健、助産診断・技術学演習Ⅱ、統合看護実習 助産診断技術学実習Ⅰ、助産診断技術学実習Ⅱ、助産診断技術学実習Ⅲ、助産診断技術学実習Ⅳ</p> <p>（大学院）看護研究特論、看護倫理特論、育成看護学特論Ⅰ、育成看護学特論Ⅱ、育成看護学特論Ⅲ、育成看護学特論Ⅳ、育成看護学特論演習、特別研究</p> <p>2. アドバイザーとして、1年次生2名、2年次生4名、3年次生4名、4年次生3名を担当し、学修や学生生活に関する支援を行なっている。</p> <p>3. 学生支援センター長として、学生の学修・学生生活に関する大学全体での支援体制等について検討している。</p>	
2. 教育の理念・目的	
<p>学生が、4年間の学修の成果として、自ら考え行動する力を持った人間となれるよう、そしてその力を看護という専門的な場面で発揮できるようになることを目指して教育に携わっている。</p> <p>そのために大切にしていることは、学習者の主体性の尊重と成長の機会の提供である。また、機会を活かして学習できるようにするために、学生の状況や特性に応じた支援にも留意している。</p>	
3. 教育の方法	
<p>1) 学生との接し方</p> <p>学生の考えや感じたことを聞く、行動の理由を聞く。学生の考えや感じたことを否定するのではなく、学生自らが改善すべき点や補うべき点に気づけるような接し方を心がけている。</p> <p>2) 授業の工夫</p> <p>配布用シラバスを作成し、授業の初回に15回分全ての事前事後課題や課題の評価基準を詳細に示し、学生自らが計画して行動できるように工夫をしている。評価基準を明示するとともに、筆記試験やレポート等の課題は全て学生に返却し、公平性を実感できるようにするとともに、学生の疑問に対応できるようにしている。また、授業方法では、時系列やテーマごとに授業を配列し、学生が流れに沿って学習することで混乱しないようにすることや、実際場面を示しながら授業することで今の学修がこの先にどのようにつながるのかを学生がイメージできるよう心がけている。</p> <p>3) FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加</p> <p>学内のFD研修会に参加するとともに、高等教育の方法等に関する研修会に年1～2回参加している。2020年度は、日本高等教育開発協会主催のセミナー(2021/3/13,14)に参加した。</p> <p>4) 自らの専門分野の成長</p> <p>周産期の母子のケアに関わる共同研究3テーマに取り組み、研究の成果を母性看護学や助産学の教育に盛り込むようにしている。</p>	
4. 教育の成果	
<p>2020年度は、担当の科目が授業評価の対象になっていなかったため、学生からの評価は不明。</p> <p>FDに関する研修会での学びを活用し、突然の遠隔授業への切り替えもスムーズに行えた。遠隔授業への切り替えで一部シラバスを変更せざるをえない部分も生じたが、学生にはその都度説明し、混乱なく進行できた。前期開講の1科目（母性看護学概論）は、e-ラーニングが主となったが、学生たちからは「課題の問いが面白いからやる気が出る」などのコメントが複数授業の感想として記述されており、ある程度は、工夫の成果があったのではないかと考えられた。</p>	
5. 今後の目標	
<p>1. 2021年度の目標</p> <p>助産師課程の教育内容をICEモデルで整理し、学生自身が自らの学びを体系的に捉え、その成果を実感できるようにする。</p> <p>看護学科カリキュラムについてカリキュラム・マップを作成し、学生が学修をDPに体系づけて捉えられるようにする。</p> <p>2. 長期目標</p> <p>各看護学領域を横断的に学修できる科目や仕組みづくりを行う。</p>	

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

1. 授業評価

2021年前期の「母性看護学概論」の授業評価では、全項目において大学全体の平均を上回る評価を得ていた。

2. シラバス

母性看護学概論の配布用シラバスを添付。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	堀内 美由紀
1. 教育の責任			
担当科目： 大学院：国際医療特論，国際看護特論，在宅看護学特論II，在宅看護学特論演習 学部：基礎演習I(2グループ計2コマ)，看護理論，国際看護論，災害看護論，看護研究II，統合看護論，統合看護実習，基礎看護学実習I，国際看護論演習(海外研修，チェンマイ引率) 学生支援： 国家試験対策WG長，社会・国際連携センター(国際交流事業-韓国・カンボジア-，個別留学サポート)			
2. 教育の理念・目的			
学生の自立した学習を支援する。 学習者中心の教育であること，適正な評価を行うこと。そのためにはどのようなことが必要か，常に考え，教育に真摯に向かうことを信念としている。			
3. 教育の方法			
自己主導学習(SDL)と自己調整学習(SRL)を誘導できるようにインストラクショナル・デザイン(ID)の理論を用いて，授業設計をしている。学生に評価指標を示すためにルーブリックの活用など工夫している。R2年度は，授業形態の変更が必要な事態となり，MoodleをLMSの使用を試みた。学習課題に応じた学習方略があることは，多くのID理論家が説明している。例えば，言語情報の修得が重要な科目においては，非同期型の授業設計は効果的と考えられている。対面授業に多くの制限があったR2年度は，演習や実習をどのように学内で代替するか，が議論される一方，学生の学びに主眼を置けば，代替の方法を考えるより(代替はできないという視点で)，到達目標を変更し学びを保証する方向性で考える提言がされ。意外に「臨地でなければ学べない」ことは少なく，これまでの臨地実習の内容と質を見直す機会になったという報告もある。確かに繰り返しペーパー上で事例展開する方がアセスメント能力は臨地における1事例のみより高まると推察できる。看護師基礎教育には指定規則があるが，教員が柔軟な思考を持つこととで，多くの方略を考えられることを意識し，さらに学生の声を聴きながら授業計画を立てている。文部科学省は7割以上対面での授業を示唆しているが，同期・非同期の利点を確認したR2年度であったと考えるので，他大学の取り組み，文科省の意見，など情報を積極的に収集し，本学のICT教育の推進という方針も鑑み，効果・効率・魅力ある授業設計について考えてきた。年齢を重ね，自分自身が臨床からは離れて時間が経過している。教員の「経験」が役に立つ授業内容は限定的であることを自覚して，授業準備に取り組んでいる。授業設計や授業評価，ポートフォリオ，ルーブリックなどの研修会・公開講座・学会には積極的に参加している。			
4. 教育の成果			
当然のごとく事前学習ができるように実装したeラーニングでの課題提示は，学習の報告性への示唆として役立ったと考えている。学びの確認テストもオンライン上に配置し，満点になるまで繰り返し受験可能としたことは(最高得点を成績として反映すると説明)，学生自身が理解度を測る上で役立ったと考えている。一方，eラーニング上の課題への取り組み(アクセス状況や提出物の内容で確認)は学生間で格差があり，またその格差も後半広がったような状況がある。さらに，期末試験でも正解率に格差があるので，今後，これらの状況についての対策に検討が必要と考えられる。			
5. 今後の目標			
「ICT教育の推進」という本学のビジョンのひとつである。昨年からの遠隔授業やeラーニングの活用はよい機会であったと考える。COVID-19パンデミックにより僅かながら前進した本学でのICT教育をゼロに戻すのではなく，あちらこちらで聞かれた「ピンチをチャンスに変える」べく，発展的にさらに学生たちの学びの質を高められるICTを活用した授業設計/計画ができるように，自分自身も研鑽を積みたい。			
<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス，授業評価アンケート等) 			
堀内美由紀 リサーチマップにまとめています https://researchmap.jp/m_horiuchi			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	三浦 康代
1. 教育の責任			
<p>○担当授業科目：公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）・公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）・公衆衛生看護学方法論Ⅱ・公衆衛生看護学診断演習・公衆衛生看護学実習Ⅰ・公衆衛生看護学実習Ⅱ・公衆衛生看護学実習Ⅲ・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱ</p> <p>○保健師国家試験対策講座担当：疫学、精神保健、障害者保健、産業保健、公衆衛生看護管理</p> <p>○学生支援：アドバイザー担当教員、公衆衛生看護学領域長、実習部会長、卒業研究WG</p> <p>○登美ヶ丘キャンパス衛生委員会</p> <p>○奈良県看護学会研究委員会</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>私の教育理念：社会的弱者の立場に立つてものごとを考え、支援できる人を育てることで。</p> <p>私の教育目的：学生に思考力、自己肯定感、粘り強さを身につけることで。</p> <p>私の具体的教育目標：・保健師国家試験合格率100%達成 ・学内において新型コロナウイルス感染症のクラスターを発生させないこと。</p> <p>私の価値観：科学的根拠にもとづく真理に価値観を持つ一方で、科学では証明できない人間の感情や関係性にも価値観を置いています。</p> <p>私の信念：ものごとを公平に見定め、自分の教育任務を全うし、社会貢献できる人を送り出すこと。また、卒業生が母船（奈良学園大学）に帰ってきて羽を休めることができるような人になることで。</p>			
3. 教育の方法			
<p>私の学生との接し方：学生とは基本的に上から目線で接するのではなく、学生の意見をまずよく聴き、対等の関係性で、ウエルカムな姿勢を基本として接するようにしています。</p> <p>授業の工夫：社会的弱者の支援事例の紹介。健康相談の演習において、学生間で相談者役、保健師役でロールプレイし、グループメンバー間での評価後に教員が助言。健康教育においては、さまざまな教育媒体の工夫について学生とともに考える。演習や実習においては、地域診断の指導を学生の力量に合わせながら粘り強く行う。健康教育のデモンストレーションにおいて、教員が助言する前に、学生間で相互によかったところや改善点について話し合いをさせる。授業の1コマに行政で活動する卒業生の保健師をゲストスピーカーによんで、日頃の活動ややりがいを語っていただき、座学で学んだこととつなぎ合わせて、行政の保健師の活動をより身近にイメージさせる。卒業研究も含めて、学生からの質問や相談には勤務時間に関係なく対応している。保健所実習や学校保健実習の学内実習の工夫として、新型コロナウイルス感染症発生率の算出（都道府県、市町村別）、学内環境測定（騒音、照度、熱中症指数、二酸化炭素濃度測定）、学内ポスターの作成、段ボールを用いた避難所づくり、避難所運営のシュミレーションゲーム、視聴覚教材（市販のものと教員作成混合）、困難ケースの事例検討等を行っている。</p> <p>○研修：奈良県看護協会と奈良県看護学校等主任協議会共催の教員研修会に参加している。</p> <p>○専門分野の成長：毎月の結核勉強会への参加、各種学会誌への発表、各種学会誌から依頼された査読、各種学会参加をしている。</p>			
<p>○達成できたこと：自分が研修会や学会等で得た情報を授業に活かしたり、自分が学会誌に発表した内容を授業資料に活用することにより、授業内容がより充実した。</p> <p>保健師課程出願者が一挙に25名と倍増した。</p> <p>○達成できなかったこと：保健師国家試験合格率100%の維持ができず、現役合格率は91.6%であった。</p> <p>○授業アンケートの結果：資料が後で見てもわかりやすいと回答した学生が多かった。</p>			
5. 今後の目標			
<p>○短期的目標：次年度保健師国家試験合格率100%をめざす。</p> <p>次年度保健師課程選択者を今より増やす。</p> <p>2022年度新カリシラバスの作成をする。</p> <p>○長期目標</p> <p>新カリにおける「地域・在宅領域」「公衆衛生看護学概論」の科目構成の位置づけと内容の検討を行う。</p>			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

○実習部会の実習総括

○保健所実習（学内実習）の内容

○研修会や学会への参加状況

・ FD・SD研修会参加

・ 結核勉強会・日本産業看護学会参加・日本社会医学会参加・日本看護研究学会参加・奈良県看護協会教員研修会参加・奈良産業保健総合支援センター産業保健研修会参加

・ 日本社会医学研究に論文発表「新あいらんシェルター居場所棟利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告」

（2021.1）・保健師ジャーナルに活動報告発表「大学衛生委員会が作成した新型コロナウイルス感染拡大防止のための『出席停止期間早見表』と『出勤不可期間早見表』（2021.3）・本学助成金で動画「笑って健康に ラフターヨガ」作成（2021.12）・社会医学研究・医療福祉情報行動科学研究・奈良県看護学会の査読

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	守本 とも子
1. 教育の責任			
担当科目 学部：在宅看護学概論、看護理論、ターミナルケア論 大学院：国際医療特論、看護倫理特論、宅看護学特論Ⅰ、在宅看護学特論Ⅱ、在宅看護学特論演習、国際看護特論、看護理論特論、在宅看護学特論Ⅳ、大学院修士論文指導			
2. 教育の理念・目的			
看護の理念・目的：健康と人間を深く理解し、人間性と幅広い視野を養う。そのためにそれらの基盤として、幅広い教養と専門知識、技術を習得すること、また、看護実践における総合的な能力を養成し、人々の健康と福祉の向上に貢献する人材を育成する。さらに看護の発展に寄与する実践者、教育者を育成する。自らの教育理念と目的：人を愛する心を持ち、看護の社会的機能を担うことのできる看護職を育成する。人口や疾病構造の変化、療養の場の多様化などに伴い、看護職には多様性、複雑性に対応した看護を創造できる能力を培う。また、看護を生活者の視点で実践する能力を培う。			
3. 教育の方法			
まず、アドミッションポリシーとして、人を愛し、高い倫理観を持っている人、看護に関心のある人を求める。そしてカリキュラムポリシーとして豊かな人間性と高い倫理観を養い、看護の実践、教育を遂行するための共通教育科目を設定する。さらに専門領域における実践力、教育力を育成するための専門科目を設定する。それぞれの段階での教育が確実に進められるよう、試験を課し、教育の順序性を守るカリキュラムを構築する。また、地域他職種や他機関との連携をとりながら地域の人々の生活を支えるケア体制や保健医療システムの理解を促す教育を実践していく。また、近年のコロナ渦での教育の方法としては遠隔授業を充実させる必要がある。対面授業とは異なり、やや一方的な授業の進め方になりがちであるため、様々な工夫を凝らし、学生が理解しやすいように創意工夫への努力を続行していく。他方、学生の人格の形成に向けての教育方法を考えることも重要である。遠隔授業では育成しにくい教育内容はなんであるか、教員間でのディスカッションを行い、教員全体で教育方法を考案していくことの努力が必要である。			
4. 教育の成果			
本年度はコロナ問題が発生し、特に実習に大きな影響を及ぼしたが、ZOOMでの臨地実習に近づけた形の学びができた。これらは共通教育や専門教育を確実に進めてきた成果だと考える。また、本年度の国家試験合格率も98.8%と全国平均を上回っていた。			
5. 今後の目標			
短期的には、オンライン授業を円滑に進めていくために、講義内容を工夫し、わかりやすい授業を構築していく。遠隔授業の欠点として、学生間の交流をどのように深めていくかも喫緊の課題である。長期的には、個々の学生の個別指導を徹底して実施し、できるだけ、留年生が出ないように教員が一丸となつて取り組んでいく。 2022年度より、新カリキュラムに則った教育が展開されていく。新カリキュラムの教育内容を遵守しながら、奈良学園大学の特性を生かした教育を展開していくことが目標となる。			
<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等） 			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	吉村 雅世
1. 教育の責任			
<p>授業科目 老年看護学概論、老年看護援助論、老年看護援助論演習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱ、統合看護学実習、卒業研究Ⅱ、 ヘルスアセスメント、感染症看護、ターミナルケア論、看護倫理特論 看護研究特論 在宅看護特論Ⅰ 在宅看護特論Ⅱ 座在宅看護演習特論</p> <p>各種学生支援 教務関係の支援(教務部会長) 年度初めのガイダンス計画 1年生ガイダンス、履修状況の確認、各科目期末試験の確認、次年度入学前教育の企画・実地、 定期試験時間割の作成、試験監督者の決定、 次年度履修の手引き作成、次年度科目担当者の調整・決定、次年度時間割の調整・決定、 単位習得状況の確認、欠席の多い学生対応 等 アドバイザー1年2名・2年4名・3年2名・4年3名 (履修支援 相談 面談 保護者面談) 看護学科長の業務 学年全体の把握 学籍移動 コロナ禍の公欠対応 履修状況の把握、アドバイザーとして学習支援ができるよう教員の支援</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>看護の専門職である自己の責務として、次代を担う後輩を育て、医療の発展に寄与する。 高等教育を受けた看護師として社会貢献できる人材を育てる。 看護実践を基本に、気づき・考え・判断し、行動できる人材を育てる。 人を全人的に理解し、健康を支えることのできる医療職を育てる。 看護師国家試験を受験できる卒業生として、知識・技術・人間性を培った人材を育てる。</p>			
3. 教育の方法			
<p>学生との接し方 対等の人間として尊重して接する。自己を語ることを支援し、語りから内省・思考過程の情勢、自己成長につなげる。</p> <p>授業の工夫 講義では、知識の獲得のための方略として、重要な内容を質問や小テストなどを用い強化しながら進める。学びや感想を小レポートで提出してもらい、次回解説するなどする。教義の内容を具体的・実在的に理解できることを目的に事例や高齢化体験長具などの教材を工夫している。例：視覚の高齢化体験用具をクリアファイルや黄色セロファンで作成させるなどして体験する 演習・実習では、具体的・実在的な体験から、経験を語り・書くことで学びを深めることに結び付けられるよう学習支援を行う。対話の機会を作る。学習成果を可視化できるよう、プリント教材に書き込みながら学習成果を上げる工夫をしている。 具体的・実在的な経験ができる環境を整える。</p>			
4. 教育の成果			
<p>授業アンケートは、オムニバスで実施するものが多く自分だけに対する結果とは言えない、また、年度により若干の変動はあるが、5段階で3の後半である。毎回授業の後の小レポートでは目標する学びが記述されている。 今年のオンライン授業では、従来の方法が十分・効果的に実施できているか確認できない。授業評価は5段階の4前半であったが、回答数が少なかった。学生も通常の授業と比較できないのではないかと考える。</p>			

科目、シラバス、科目教員が担当した。また、オンライン授業と対面授業とを併用して実施する場合は、その旨を記載する。

5. 今後の目標

短期的

オンライン授業・面接授業とも、学修目標と教育目標を達成できる方法を1コマずつ、丁寧に実施していく

長期的

毎回・毎年 自己の授業を振り返り、教授方法や教材の準備などの課題を明らかにし、対応していく。

授業の設計図であるシラバスを見直していく。

- 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	佐藤 郁代
1. 教育の責任			
<p>私は保健医療学部看護学科の教員として、主に在宅看護に関わる科目を担当している。2021年度の担当科目は、オムニバス形式を含め、7科目である。在宅看護学概論・在宅看護援助論・在宅看護援助論演習・在宅看護学実習・卒業研究Ⅱ・統合看護学実習・感染看護は専門科目「看護の統合と実践」にある必修科目であり、感染看護は選択科目である。これらは、2年次に「個に対する看護を実践するための専門的知識」を、3年次に「個に対する看護を実践するための技術」と「創造性と協調性をもって主体的に看護を実践する力」を、4年次に「変化に対応できる汎用的能力」を獲得することを主眼に置くことが求められていると考えている。地域で生活しながら療養する人々と、それを取り巻く人々や環境、施策を理解し、既習の知識を活用してクリエイティブに応用できるように教育することが必要であろう。さらに授業外では、教務部会、実習部会に所属し、学生の教育を具体的に支援できるよう職務を進め、広報委員では奈良の地域に根差した学園となるよう行動している。</p>			
2. 教育の理念と目的			
<p>本学におけるわたしの役割は、文科省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告」に記載されている、少子高齢社会や医療の高度化等の社会情勢の流れの中にある看護ニーズへの期待と包括的なケアの推進による「専門職連携教育」と「臨床判断力（臨床推論力）」を、本学の「時代の進展に対応し得る広い視野と創造性」「誠実にして協調性のある心身ともに豊かでたくましい実践力」を関連付け、幅広い視野で物事を見聞きして考察し、創造的に実践できる教育を行うことであると考えている。暗記やノウハウではなく、ひとつひとつを丁寧に熟考できるように工夫し、他者の意見を聴き自己の意見を述べられるような授業づくりを目指していきたい。</p>			
3. 教育の方法			
<p>授業展開の基本形として、導入では、前週の復習課題を基にしたグループワークを行い、発表をする。それらを複合し、本時の授業へとつなげる。授業展開では、事例をもとに、テキストおよび国家試験出題基準に準じた内容を網羅する。事例を用いることによって、在宅療養者の生活イメージ理解へとつなげる。まとめでは、ITを活用したミニテストを行い、重要部分の定着を図る。授業後には、自ら関心をもった内容や教員から出される新たな課題等に基づく復習に取り組み、自主的な学修の発展化に結びつける。その他、在宅看護援助論では、ディベートを取り入れ、論理的思考力と批判的思考力の育成に努める。</p> <p>また、大学内でのFD研修会には積極的に参加し、他の教員の授業を聴講するなどして、教育力の向上に努める。新カリキュラム改正に伴う地域・在宅看護論の授業構築の勉強会に参加する。</p>			
4. 教育の成果			
<p>授業はわかりやすく、聞き取りやすいとの声もあったが在宅看護をとらえる時の私自身の視野が狭いことが課題であると考えている。看護が病院から在宅に移行するなかで、療養に至る前の予防的視野が必要である。</p>			
5. 今後の目標			
<p>短期的な目標としては、FD研修会で得た知見ならびに作成したTPを授業づくりに役立てていく。毎回の授業終了時にアンケートを取り、次回の授業開始時にフィードバックしていく。</p> <p>長期的な目標としては、ウェルビーイングの視点を入れた授業展開に務める。</p>			
<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等） 			

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	芝田 ゆかり
1. 教育の責任			
<p>担当授業科目とその学修支援は、以下のとおりである。</p> <p>前期①公衆衛生看護学概論－85名、必修2単位15コマを科目責任者として担当：授業毎に目標を設定し、学生が目標達成度をリフレク ションし、確認のため小テストを行った。定期試験に筆記試験を実施し、追再試者はなかった。</p> <p>②公衆衛生看護学診断演習-4名の専任教員と共に選択2単位共同で担当：個別の学生支援とグループ支援を実施した。</p> <p>③統合看護実習-学生5名担当、必修2単位:実習目標到達できるように、臨地における実習と学内において個別・グループ支援を実施した。</p> <p>④在宅看護学概論－85名、必修1単位、2コマ授業担当し、筆記試験を他2名の教員とともに分担して評価。</p> <p>後期⑤公衆衛生看護学Ⅰ－4名の専任教員と共に必修2単位4コマを担当：授業毎に目標を設定し、学生が目標達成度をリフレク ションし、 確認のため小テストを行い、毎回評価する予定。</p> <p>⑥統合看護論－4年次必修2単位、1コマ担当予定</p> <p>通年⑦公衆衛生看護学実習Ⅰ－学生3名担当、選択3単位、臨地（学内含む）において実習目標到達できるように、個別・グ ループ支援実施。</p> <p>⑧卒業研究Ⅱ－学生4名担当、必修1単位、実習目標到達できるように、個別・グループ支援を行っている。</p> <p>その他、学生支援として、学生生活WG（ワーキンググループ）活動や学生アドバイザーとして、学生生活や教学及び実習等の 個別の相談対応を行い、学生の心身の支援を行った。</p> <p>講義には、以下の目標を学生が行うことができるように、紙面で準備した。</p> <p>【短期目標】</p> <p>①学生が自身で学習の達成度を%で自己評価できる。</p> <p>②評価の根拠として学習成果物やリフレクション（内省）のコメントを記述できる。</p> <p>保健師国家試験対策の講義と模試監督を実施予定である。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>自らの教育理念は、学生が本学の目指す看護職像「人を支える人になる」ために、人間の尊厳に基づいた心豊かな人間性を形 成し、看護の専門能力を養い、学生自らが社会貢献を目指す看護実践者を育成することである。</p> <p>教育目的として、①目標に向かって主体的で柔軟な行動がとることができる、②継続して看護専門職者としての能力を育むこ とができる、③科学的根拠に基づき看護実践を展開できる、④社会情勢の動向を踏まえ、あらゆる人々とパートナーシップを構 築し、保健・医療・福祉・教育領域と連携・協働できる能力を養い、⑤学生自身の問題解決能力の向上を目指すことである。</p> <p>看護の対象となる人々の多様な価値観を認識し、価値観の違いを認めることを大切にしたいと考えている。自らの教育の信念 は、学生の成長を見守り、必要な時には様々な選択肢を示し、学生が意思決定、行動できるように支援することである。</p>			
3. 教育の方法			
<p>・学生との接し方</p> <p>アドバイザー担当学生には、面談やメール・電話等の相談対応を行っている。学年の始めには、履修登録を確認したり、成績 発表後にはアクティブアカデミーで修学ポートフォリオで確認し、必要時学生に連絡をとっている。また学生自身からSOSを 出すことができるように「困った時には連絡（予約面談）を！」と説明し、支援している。また授業については、チャットや メールで質問への対応を行っている。</p> <p>提出物で加筆・修正が必要な時には、個別支援を実施している。</p> <p>・授業の工夫</p> <p>小テストで理解が不足している内容を次回で説明したり、授業評価アンケートで学生のニーズを把握し、授業内容の改善を 図っている。</p> <p>・F D/S D活動等に係る内外の研修会への参加</p> <p>コロナ禍の影響により出張せず、オンラインでの研修に出席する予定。</p> <p>・自らの専門分野の成長</p>			

4. 教育の成果

- ・自らの専門分野の成長達成できたこと % :
- ・自らの専門分野の成長達成できなかったこと % :
- ・授業評価アンケートの結果
- ・長期目標
 - ①達成率 % その根拠
 - ②達成率 % その根拠
- ・短期目標
 - ①達成率 % その根拠
 - ②達成率 % その根拠

5. 今後の目標

- ・長期目標
 - ①学習目標を明確化できる。
 - ②学生自身が「目標を達成できたか」を評価し、達成動機に結びつけることができる。
- ・短期目標
 - ①学生が自身で学習の達成度を%で自己評価できる。
 - ②評価の根拠として学習成果物やリフレクション（内省）のコメントを記述できる。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

- ①～⑧のシラバスを添付
 - ①公衆衛生看護学概論
 - ②公衆衛生看護学診断演習
 - ③統合看護実習
 - ④在宅看護学概論
 - ⑤公衆衛生看護学Ⅰ
 - ⑥統合看護論
 - ⑦公衆衛生看護学実習Ⅰ
 - ⑧卒業研究Ⅱ

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科
氏名	小林 由里
1. 教育の責任	
1) 2021年度担当科目：看護コミュニケーション論、看護倫理学、看護管理学、感染看護、基礎看護技術演習Ⅰ・Ⅱ、ヘルスアセスメント、看護理論、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、統合看護学実習、看護管理学特論（大学院） 2) 各種学生支援：2021年度：実習ワーキング、カリキュラムワーキング 実習ワーキングにおいて実習計画の立案、実習調整など、実習を履修するための支援、カリキュラム検討ワーキングにおいては、カリキュラム改正に向けて効果的な学習を支援するためのカリキュラム検討	
2. 教育の理念・目的	
本学保健医療学部の教育目的、ディプロマポリシーに則り、教育活動においては、以下の3点を目的としている。 1) 看護の対象を生活者として捉え、尊厳をもったかけがえのない一人の人として対応できる豊かな人間性の育成 2) 看護実践において必要な基礎的な知識、技術の習得と自ら考え判断できる力の育成 3) 誠実で、倫理的判断や意思決定ができる力の育成 人は、多様な価値観や信念をもって生きている。その多様性を受け入れ、認められる人間性と、誠実さは、人を対象にした看護職に大切なことであると考えている。	
3. 教育の方法	
教育の理念や目的を達成するため、以下のような方法を実施している。 1) 授業の工夫：授業はシラバスの詳細を初回のガイダンス等や、毎回の授業終了時に提示・説明し、学生が毎回どのようなことを学ぶのか心づもりができるよう工夫している。また、効果的な学習となるよう、事前学習課題を提示するが、学生が負担と感じたり、何かを転写して終える、というのではなく、自ら考えながら取り組むことができるよう、様式の工夫や学習量を調整している。看護実践は、机上の学習や紙上事例では、臨床の実際がイメージしにくいいため、できるだけ臨場感を持たせる演習方法を工夫している。基礎的な技術の習得についても、方法ができればよいのではなく、その対象が一人の尊厳ある人であり、生活者であるという意識をもち、倫理的にも配慮した関わりについて考えることができるよう、発問などで問題提起をして思考を促している。さらに、学生が、看護に関心を高め自分のキャリアデザインを開発していけるよう、また自ら主体的に学ぶ力の育成をねらい、私自身の臨床での経験を教材化して活用している。特に、安全な看護実践は不可欠であり、各講義・演習・実習指導に当たっては、強調して教育内容に取り入れている。 2) 学生へは、自分の考えを自分の言葉で語れるようになってほしいと考えており、実習などでは、自らの学びのプロセスを語ってもらうようにし、学習者の学習目標到達度を確認している。学生がどのように感じ、考えているのかを共有しながら、目標到達へ導くように心がけている。	
4. 教育の成果	
1) 授業の工夫：R2年度は特にコロナウイルス感染症拡大防止のため、対面授業からオンライン授業への変更もあったため、シラバスの詳細やスケジュールを学習支援システムツールを活用して行うようにしたことで、学生からも毎回の内容がわかりやすく学習の準備がしやすかったとの反応も得ることができた。事前学習課題のツールを活用しての提示・提出としたことで、学生の取り組み度も把握しやすかった。他の課題との重複があったため、学生の負担感もあった。演習も対面とオンラインのハイブリットとしたが、事前に作成したVTRは、学生から「臨場感があり、自分で考えることができる授業だった」という反応を得た。毎回、短文でも振り返りレポートを記載することにより、学生は自らの考えを論理的に整理する力がついてきたようにも感じられる。自身の臨床での経験を教材化についても、学生からの授業後振り返りシート等の記載から、イメージ化につながったという反応があった。	
5. 今後の目標	
1) 短期目標：基礎看護学領域において、 ①看護実践の基礎となる知識・技術について、学生が自ら考え行動して習得できる教育の実践。 ②看護の対象を尊厳をもった一人の人と捉え、倫理原則に基づき判断できる力を育成する。 2) 長期目標：学生が自ら考え、行動できる力、臨床判断力を育成するための教育方法として、アクティブラーニングやIBL（Inquiry Based Learning）に関する教育方法の修得を目指し、活用できる。	

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

自らの授業実践力や教育力、研究実践能力の向上のため、本学のFD/SD研修への参加はもちろんのこと、学外の研修会へ参加している。また、学内には、アクティブラーニングやIBLに長けた教員がおられるので、勉強会の依頼などにより、研鑽していきたいと考えている。学会については、日本看護学教育学会、日本看護診断学会、日本看護研究学会、日本エンドオブライフケア学会に所属している。現在大学院にて、エンドオブライフケア看護学を専攻して研究に取り組んでおり、2020年度は、日本看護診断学会、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会、日本がん看護学会のオンライン開催に参加した。

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	井上 葉子
1. 教育の責任			
<p>私は、奈良県内での大学病院看護師、行政保健師、病院保健師、看護専門学校（担当：基礎看護学、地域看護学、在宅看護論）専任教員等の勤務の後、奈良文化女子短期大学衛生看護学科助教、宝塚大学看護学部非常勤講師、白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻講師として「在宅看護論」の領域責任者を担当してからの、大学教員生活は8年間に及ぶ。現在本学の保健医療学部看護学科公衆衛生看護学領域に所属し、主に看護師・保健師の養成に携わっている。</p> <p>現在は、看護学科の科目として、「公衆衛生看護学方法論Ⅰ」「地域包括ケア論」を単独で開講しており、「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」「公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）」「公衆衛生看護学診断演習」「公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）」「公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）」「公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）」「感染看護」「統合看護実習」「卒業研究Ⅱ」は学科でのオムニバスまたは共同開講科目である。また大学院（看護学研究科）の「在宅看護学特論Ⅳ（地域包括支援）」をオムニバスで担当している。</p> <p>2021年度の担当科目</p> <p>看護学科専門科目</p> <p>単独：公衆衛生看護学方法論Ⅰ，地域包括ケア論</p> <p>共同：公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動），公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健），公衆衛生看護学診断演習，公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動），公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健），公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健），感染看護，統合看護実習，卒業研究Ⅱ</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護師・保健師に必要な基礎的な知識の習得。 2) 自ら考え、表現できる力 3) 社会で活用する力 <p>基本的な方針として学びの主体は学生であり、教え込むことをできるだけ避けようとしている。学生自身が考え、気づき、自分なりの答えを導き出し、自分のものとするためには、考える上でのヒントや道筋は提示しても、答えは先に出さず、学生自身が答えを出すまで待つ時間を確保することに努めている。</p>			
3. 教育の方法			
<p>学生との接し方：学生と向き合う時間を大切に、授業のみでなく、構内などで出会ったときの些細な会話も、学びにつながり、なにかの動機づけになる可能性があると考え、大切にするようにしている。</p> <p>授業の工夫（授業の方法、内容等）</p> <p>例として「公衆衛生看護学方法論Ⅰ」での授業について示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 授業においてを毎回本時における目標を提示し、この授業での内容と目指すべきゴールはどこかを明示している。 2 授業中はあまり規律に制限をかけず、隣と話すことなどにより学習をより深いものになるようにし、知識の共有が行われやすくしている。もちろん私語などは注意し、その授業に会ったコミュニケーションが円滑に行われるようにする。 3 授業における学生の様々な学びの内容を確認するために、授業終了時には「授業振り返りシート」で学生の学びや感想をとらえる工夫をしている。またここでの質問には授業内で必ず答えるようにしている。 4 授業中は講義形式では、プレゼンテーションソフトのスライドを映し、講義を進めている。このスライドは、GoogleClassroomにスライドコピーをPDFでアップロードし、学生がスマートフォンやPCなどでいつでもどこでもアクセスできるようにしている。そのため、授業中は、PC、タブレット、スマートフォンの使用を推奨している。 5 看護技術や方法については動画教材等を用いて学生に具体的なイメージがもてるようにしている。 6 できるだけ、学生自身で考えるように、グループ活動を取り入れている。 7 授業を通しての学習の成果について毎回自己評価を求めている。学生自身にとってその授業における学習がどうだったのかを考える時間を取るようにしている。 <p>FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加</p> <p>学内で開催されるFD研修には毎回欠かさず出席し参考にしている。授業見学においても学科教員だけではなく、できるだけ他学科の教員の授業見学にも出席し、参考になる点は取り入れるようにしている。授業評価アンケートの結果より、授業の在り方を反省しその次の授業に活かすように心がけている。</p> <p>自らの専門分野の成長</p> <p>また全国保健師教育機関協議会が開催する、保健師教育に関する研修や看護協会が主催する研修会にも積極的に参加し最新の情報収集に努めている。</p>			

4. 教育の成果

達成できたこと、できなかったこと（達成レベル）

教育の成果として、最も顕著と感じているのは、卒業生が保健師として行政機関で活躍をしていることである。保健師養成に携わる教員として、まずこの部分は成果としてあげたい。公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）では3~6人の学生の実習指導を担当しているが、毎年、2~5人が保健師として就職しており、それ以外の学生も、ここで学んだことを礎として、将来保健師として働きたいという思いを抱く卒業生が多く、卒業後に保健師での就職に関する相談を受ける事も多い。

一方で、保健師を志望する学生数の減少化が見られ、保健師という職種の魅力と仕事内容について学生に伝達しきれていないと感じることがあり、今後の課題である。

授業アンケートの結果

授業評価アンケートでは、8~9割の学生からわかりやすかった、満足いくものだったとの評価であった。

5. 今後の目標

短期的目標

大学において看護師・保健師として活躍し続けることができる人材を育成することである。そして、看護師・保健師となった卒業生が将来にわたって自らの知識、スキルを磨き続けるために主体的に学ぶ意味と姿勢を学生の内から、根付かせて行きたい。そのためには、自身の教育活動、研究活動について学生に伝えることはもちろんだが、学会発表、論文掲載など社会に情報発信することが重要であると考え。

長期的目標

保健師の魅力とその専門性について情報発信し、保健師を目指す人材を確保することである。そして現場で活躍する保健師の活動を支援するための技術、システム等の開発や現任教育に役立つ教材等の開発など、保健師の実践力を向上させるための教育活動・研究活動を行いたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

根拠となる資料の添付

- ・ 「公衆衛生看護学方法論Ⅰ」シラバス
- ・ 「公衆衛生看護学方法論Ⅰ」授業アンケート

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科
氏名	高田 勝子
1. 教育の責任	
私は奈良学園大学保健医療学部看護学科に所属している。 担当科目： ・精神看護学援助論 ・精神看護学演習 ・精神看護学実習 ・国際保健医療看護論 ・統合看護学実習 ・卒業研究Ⅱ 学生支援： ハラスメント相談員 病院勤務後、大学院（修士・博士課程）でヒトを対象とした脳活動の役割の研究と国際保健医療活動を行ってきた。 2018年度から本学の専任教員となり現在に至る。	
2. 教育の理念・目的	
医療人になる人材に求められるのは、医学・看護学の知識の習得に加えて、患者対象者のことを一番に考えQOLの向上に努めることと、コミュニケーション技術であると考えます。さらには、チーム医療の中で他の医療従事者が何を考え、どのような方針で患者に向き合うのかを相互に理解し、対等に立てる実践力を身につけなければならないと感じます。これからの保健医療の教育で求められるものは、グローバルな視点を持ち、国境を越えたすべての人を対象とし、対象者の健康に関する多岐にわたる問題に対応できる力であると考えます。従って、高度な実践に根ざした、質の高い教育の工夫が必要と考えます。また、他の職種と同様に、資格取得後も生涯に渡って、新しい知識や技術を絶えず取り入れるために勉強し努力を続けていく必要があります。私は学生が持つ好奇心とやる気を大切に育て伸ばすこと、学生自身が自己効力感を高めていける支援、1人1人が個性のある「自分で考え成長できる」医療人になれるように心掛けたい。	
3. 教育の方法	
看護の講義と演習ではアクティブラーニングを取り入れ、学生の考えや意欲を引き出せるように取り組んでいる。グループでのディスカッションを大切に、意見を発言する場を作り、講義の最後には気付きや自分の考えが言葉に出して発言できる、または文章で表現出来るように行っている。また、学生には日頃から自分のストレスコーピング（ストレス対処法）を見つけていくこと、適度な運動をすることや基本的な食事を大切にするという考えを話していきたいと考える。具体例として現在、看護学生が抱えるストレスの大きさを実感する一方で、逆にその適度なストレスが、将来にわたる職業人としての自覚や意欲を促し、さらに生活習慣を考慮することで、ストレスに耐えうる丈夫な心身の維持に繋げていくこと。学生の間からストレス管理を行うことは、学生の間を感じる小さなストレスから、医療者になったときに受けるストレスに対して心身の健康を損なうことなく厳しい職務に柔軟に対応できることにつながると考えている。また、「身体（生と死）を見つめる心」という視点で、教育の中で死生観についても取り組んでいく。臨床現場では様々な思いを抱えている人と出会う。私たちは生きる人の看護と同時に死を迎える家族や障害と付き合う家族を支えていくことも大切であると考えます。医療者として、臨床現場に巣立っていく学生の方々には、責任の重さ、命の大切さ、生と死の両方を見つめる看護、患者さんの心の痛みに共感する姿勢、知識、技術を磨き続けることなど、人として医療人として大切なことを伝えていきたいと考える。また国際学会や講座、FD研修など積極的に参加し、グローバルな視点を持ち多様性を取り入れ、教育に活かすようにしている。	
4. 教育の成果	
教育のための成果 日本私学学校振興・共済事業団より若手・女性研究奨励金を受賞。(2019.5) 教育研究の論文 Relationship between Stress Response and Stress Tolerance Characteristics for Midwife Students Faculty of Health Sciences, Naragakuen University 10:63-73(2019) 学会発表 1)The host family notices the problem of health management in homestay. 第33回日本国際保健医療学会(2018.12.1東京) 2)死産ケア教育の取り組みー助産師学生の教育を中心にー 第13回日本周産期メンタルヘルスケア学会発表(2016 東京)	

5. 今後の目標

学生の夢や目標を応援し続け、エールを送りたい。学生が様々なことに挑戦する気持ちを支えていきたい。また、同様にストレスを抱える学生、悩む学生の声を傾聴しメンタルヘルスのケアや困ったときの相談役に少しでも力になりたいと思う。精神看護学は全ての分野に共通してつながる基本的で深い学問を追及していくこと、また国際保健医療の分野では海外での活動が制限されている中、国内でもできる国際支援を大学と地域連携をとりながら活動を継続していく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

参考資料 ・2020年度後期の「学生による授業評価アンケート」 ・2021年度「奈良学園大学」シラバス参照

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	高橋 寿奈
1. 教育の責任			
<p>私は、助教として老年看護学援助論、老年援助論、老年看護学援助論演習、老年看護学概論を担当している。前任校では基礎看護学として基礎看護学概論、方法論Ⅰ～Ⅳをオムニバス担当してきた。基礎看護学を根本とし、ほかの科目とも協調性を持ちながら、老年の特徴をとらえ点と点をつなぎ、老年看護学へと発展できるように気をつけ、全科目で看護師として人の一生にかかわる職業人として、全人的に患者をとらえられるようにしている。</p> <p>2020年度の科目担当：「ラーニングスキルズⅡ（1年前期必修）」「老年看護学概論（2年前期必修）」「老年看護学援助論（2年後期必修）」「老年看護学援助論演習（3年前期必修）」「卒業研究Ⅱ（4年前期必修）」「フィジカルアセスメント（2年前期必修）」「統合看護学実習（4年前期必修）」「統合看護学実習（4年前期必修）」「老年看護学実習Ⅰ（3年後期必修）」「老年看護学実習Ⅱ（3年後期必修）」</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>老年看護学は、現在の超高齢社会の中で主流となる、欠かせない領域である。高齢者の背景や生き方をとらえ、治療できない疾患や加齢による障害をもつ方をケアし、癒すことに重要な意味を見出し、その独自性を発揮することができるのが老年看護学だと考える。いずれ自分も行く道であり、今は理解できなくても、理解しようとし対象の高齢者を敬う気持ちをもって看護できるように教育していきたい。</p>			
3. 教育の方法			
<p>具体的には、学生が頭でわかるだけでなく得心が行くようにしていきたいと考える。そのため、授業では実際の高齢者の心身の変化をできるだけ体験させていくようにしている。根拠をもとに看護を行えるように、「なぜそれが必要なのか」や、「それはどうしてそう考えたのか」などの振り返りや、ほかの学生との意見交換の場を持ち考えの広がり等がもてるようにしている。また、基礎看護学や成人看護学からの発展として考えられるように、ほかの科目でのこの部分が発展し高齢者対象であればこのように変化する、というように対比しながら教授したりできるようにしている。実習では、学生が受け持ちの高齢社実習指導者に学生の考えを伝えなければならない場面が多いため、普段からリモートでは口頭での発表だけでなく、要点を抑えるためにパワーポイントを作成したり、対面授業では板書を学生にもさせ相手にわかりやすく説明をするなどをし、自分の意見を言う場を増やしている。また、学生の創意工夫をのばすため、新しい考えや解釈などがあれば、根拠を示しながらほかの学生へ紹介するなどして、工夫しより良い看護を行っていくという気持ちの面も伸ばすようにしている。また、失敗を恐れず不安やSOSが出したいときには適切に出せるようにしていくことの重要性を伝えるようにしている。</p> <p>臨地実習では、今年度は臨地での経験が少ないため、学生にできるだけ臨地実習と同じ経験ができるように一人1例事例を作成し、アセスメントや演習の時間を増やした。また臨地で受け入れ可能な施設があれば急遽実習先を変更交渉し、できる限り臨地で学べるように調整した。臨地での短い時間の学びを、学内で広げられるようにカンファレンスを有効につかい、受け持ち高齢者の反応や自身の考えを共有し、学びが偏らないようにした。老年看護学実習Ⅰの老健施設実習では、リモートで行い施設看護師や介護士から、認知症患者への対応や施設の特徴などの指導を受け、動画も使い施設の中野様子が少しでもわかるようにしたり、認知症の方の苦悩が理解できるようにした。また私は臨地実習の指導者や現任教育、新人教育を長年行ってきた自分自身の臨床の経験を活かし、臨地での実際にされている技術やタイムスケジュールの工夫や他の部署との協調、看護の場面におけるより安全な院内対策方法、看護師や患者が求める看護師への言動や看護技術、などを指導した。未熟で言葉だけで理解できないときには、実際に行ってみせることで伝授した。また学生の試してみたい方法などは積極的に取り入れ、改善点などはグループ学生全員で考え話し合い、再度行うことで検証していき、その手順も含めて指導をした。</p> <p>研修会参加；授業設計ワーク研修・学生への終末期ケア指導内容研修</p>			
4. 教育の成果			
<p>学内の科目については再試の学生はいたがおおむね目標達成できた。実習でも指導した学生は目標達成できた。</p> <p>今年度のリモートの授業では、できる限り双方向となるように、授業途中の意見交換や課題提出などで考えの共有ができるように努めた。</p> <p>学生の授業評価の内容には、特に改善を求める内容は記入されていなかったが、良かった点もなかったため、全体的に新しい授業体制や課題などに戸惑いがあったと考えられる。自分自身の授業の内容も、実習に対しての準備に時間がとられ、学内科目に関しても十分に教授できているか振り返り時間が不足しがちであった。次年度はもう少し授業の準備にも時間を費やしたい。</p>			

5.今後の目標

学生が受け身とならないように、できるだけ能動的に考えていける授業を行いたいと考えている。今年度が看護展開の授業も行うため、評価ポートフォリオを作成し先に学生には提示し、ゴール設定できるようにしていきたい。

座学だけでは学べないが、基本的な知識などはおろそかにせずきちんと学ばせたい、また学んだことを生かして実習できるように実習病院や学ぶ時期なども考え授業設計していきたい。失敗を恐れずチャレンジできるように、心理面のサポートも行っていきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

老年看護学学生への課題：実習事例（脳出血）

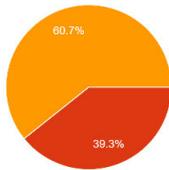
WEBシラバス参照

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科
氏名	田場 真理
1. 教育の責任	
<p><担当授業科目> 成人看護学概論、成人看護学援助論Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）、成人看護学援助論演習、卒業研究Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ、成人看護学実習Ⅱ、統合看護学実習</p> <p><各種学生支援> 授業では分かりやすい資料作りと説明に心がけるとともに、課題レポートなどの記録物はきちんと目を通し、毎回きちんとフィードバックするよう努めている。また学生が大学生生活を送る上で学習以外のことで悩むことがあれば、面談を繰り返しながら解決できるよう支援している。</p>	
2. 教育の理念・目的	
<p>看護系大学で学ぶ学生の目標は「看護師国家試験合格」と言っても過言ではない。したがって、講義・演習・実習では、学生とこの目標を共有しつつ、常にこれを意識した教育・学生支援に努めている。ただし次世代を担う看護師を育成する上では、看護師国家試験合格のみをゴールとするだけでは不足である。対象者とその周りの社会環境などを理解し、科学的根拠に基づき適切なケアへと繋げていくための基礎的な知識や技術、そして主体的に問題解決できる能力、自己研鑽し続ける能力、倫理的課題に立ち向かう能力など、社会で求められる、社会で生き抜くための能力の育成が重要である。教育・学生支援においては、常にこのことを意識して行っている。</p>	
3. 教育の方法	
<p><学生との接し方> 「看護師国家試験合格」という目標達成をするためには、まず第一に分かりやすい授業を行うこと。これは常に意識している。</p> <p>ただし、どれほど分かりやすく説明しようとも、学生がそれに集中できなければ意味がないため、学生の興味関心が湧く話題・事例をできるだけ授業（講義）では取り上げるようにしている。また演習や実習など、既習の知識と技術を応用しながら学習を深める科目においては、できる限り学生が成功体験ができるよう調整し、学生が大学での学びについて自信と満足が持てるよう接している。</p> <p><授業の工夫（例：成人看護学援助論演習）> この科目は、既習の知識と技術を応用しながら学習を深める科目であり配当年次は3年次前期である。授業のスタイルは、原則、アクティブラーニング（反転授業）の形式をとっている。具体的には、動画や資料などで事前学習を促し、事前学習に基づき少人数のグループワークにより与えられた課題を解決する中で相互に学びを深め合うという授業スタイルである。</p> <p>（2020年度は、感染拡大防止対策としてオンライン授業で実施、2021年度は、対面とオンラインのハイブリッド授業で実施している。</p> <p>オンライン授業では、ZOOMのブレイクアウトセッション機能とMicrosoftのオンラインストレージサービスを利用し、視覚的情報共有もとりながらGWを行えるように工夫している）</p> <p>授業時間の8割程度をグループワークに充て、残り2割程度は、全体でグループワークでの成果発表と教員からのフィードバックという構成である。授業後には振り返りレポートを課し、提出されたレポートは、個々に添削（コメント）して返却するという流れで進めている。</p> <p><FD/SD活動・研修会への参加について> 学内FD/SD研修会には、毎回必ず出席している</p>	
4. 教育の成果	
<p>教育する上では学生の主体的な学びを重視しているため、上記科目の授業スタイルはアクティブラーニング（反転授業）をとった。</p> <p>それにより「学生が授業中に眠る」ということはまずなかった。また事前学習をしていなければ自分も困るが、同じグループメンバーに迷惑がかかる、という心理が働くせいか、大部分の学生が毎回きちんと事前学習をして授業に参加していた。（事前学習が中途半端、という学生はいたが、全く事前学習せずに授業に参加する、という学生は0人だった）</p> <p>また、「この授業のグループワークの経験はこれから役に立つだろう」という肯定的な意見は、8割の学生から示された</p>	

1. グループワークをするにあたっての事前学習（課題含む）への取り組みの程度は？

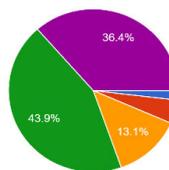
107件の回答



- 全く事前学習をせずグループワークに参加している
- 中途半端だが事前学習はしてグループワークに参加している
- きちんと事前学習をしてグループワークに参加している
- 期待以上の事前学習をしてグループワークに参加している

11. この授業のグループワークの経験はこれから役に立つだろう

107件の回答



- 全く当てはまらない
- あまり当てはまらない
- どちらでもない
- まあ当てはまる
- とても当てはまる

授業後に、毎回授業に関する感想を求めたが、多くの学生が、他の学生と学びを共有することで学びが深まる・学習意欲が向上するといった内容を記していた。この授業に関する独自アンケートでは、授業（科目）目標への到達度（理解度）自己評価は、平均すると70%をやや上回る結果であり、まずまずの教育成果が得られたのではないかと考えている。課題としては、グループワークを中心に授業を進

めていることから、グループワークが苦手な学生にとっては苦痛な時間になったことも否めず、ここへの介入について検討す

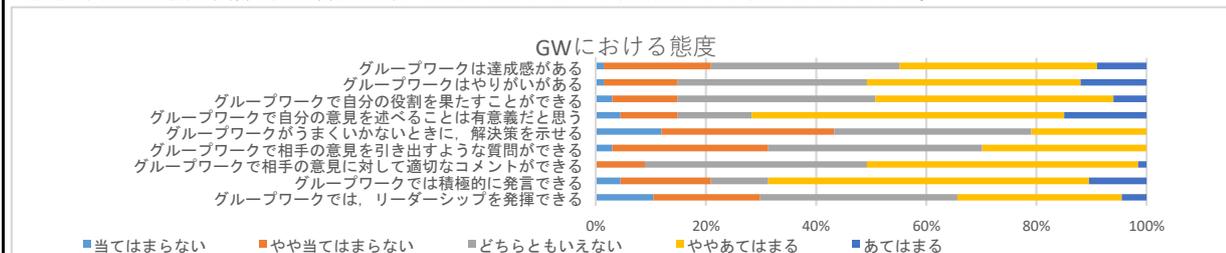
5. 今後の目標

学生の視点で、学生の興味・関心を刺激しつつ、学習過程で成功体験を味わってもらい、それを学生の自信や学習意欲に繋げられるような

満足感のある授業ができるよう授業研究を続けていきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

2020年度成人看護学援助論演習終了時に実施したアンケート結果をグラフ化したものを示す。



ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	西出 順子
1. 教育の責任			
[学部] 精神看護援助論、精神看護援助論演習、精神看護学実習、統合看護学実習、卒業研究II			
[大学院] 精神看護学特論Ⅰ、精神看護学特論Ⅱ、精神看護学特論Ⅲ、精神看護学特論Ⅳ、地域移行支援精神看護学特論、精神看護学演習Ⅰ、精神看護演習Ⅱ、精神看護学実習 アセスメント、精神看護専門看護師役割実習、直接ケア実習、上級直接ケア実習、課題研究 〔委員会〕 教務WG, カリキュラムWG, FDWG			
2. 教育の理念・目的			
<p>対象に関心を寄せ、共感的理解のもと対象の意思や考えを第一に尊重することを基盤に、心身の健康の維持・向上を目指し、対象が生きることへのイニシアティブを取り戻せるようサポートするケア実践者を育成する。</p> <p>上記の目的のために、学生と教員間の関係性においても、学生が脅かされず意思や考えを守り尊重され、学ぶことに対し主導権をもつ体験を大事にする。</p>			
3. 教育の方法			
<p>・自らの専門分野の成長のために単行本「ロジャーズ選集(上)」 「ブリーフセラピー 〔問題と解決〕の理論とコンサルテーション」 「間主観的アプローチ ―コフートの自己心理学を超えて」を熟読し、ケアの基盤をおさえた。また、雑誌「こころの科学」「精神看護」、その他学術論文に適宜目を通し、精神医療と看護の最近の流れの把握に努めた。</p> <p>・研修会等は、いずれもZoom参加で、ブリーフセラピーに関する研修会(5月)、日本精神保健看護学会学術集会(6月)、日本精神分析的な心理療法フォーラム(7月)に参加した。</p>			
『学部』			
<2年次からの概要>			
<p>昨年度前期の精神看護学概論では、精神の健康を保持するため、各自のストレスコーピング方法があることを説明し、学生自身のストレスコーピング方法も関連付けながら各自が独自の方法にて精神のバランスを維持しており、例えば対処方法が健康的に望ましくなくても、各自が状況の中で何とか生み出した方法であることを意識するように導いた。対象の共感的理解を図るために、成育歴の環境とトラウマ体験が今後のその人の生きることによどのように影響するのかを流行の漫画「鬼滅の刃」の登場人物で解説し、そしてケアとしてどういうことが必要なのかについても、他登場人物の関りの影響についても解説し理解をはかる工夫を行った。昨年度の精神看護援助論では、ゲストスピーカーとして地域活動支援センターで「当事者の語り」の活動をしている方にお越しいただき、成育歴からの体験を語っていただき、当事者の生きづらさについて焦点を当て、レポートにまとめる課題を課した。以上のように様々な角度から心理的側面に着目し対象理解をする視点を提供した。</p>			
<令和3年度前期の精神看護援助論演習>			
<p>ペーパーペイシエントで対象理解と精神状態のアセスメント、セルフケアアセスメント、総合アセスメント、看護計画の立案まで行った。方法として、1つの事例で教員が看護過程の一連の流れを解説とともにを行い、別事例をグループですすめた。グループワークの構成員は1グループそれぞれが適度に役割を担える3~4名とした。</p> <p>対象理解では、エリクソンの漸次発達論のキーワードを用い、成育過程での心理面の推移に着目し、現在への影響について考察するように導いた。精神状態については、感情のコントロールと思考内容・思考過程、認知様式に着目することに力点を置いた。そのうえで、看護においては、現状態におけるセルフケアに着目しアセスメントをすすめた。ここでいうセルフケアとは日常生活が自立している自立していないということではなく、あくまでも自分で心身をケアできること。それには精神の障害と心理面の影響を受けながらも自己の意思やニーズを自覚し、自分でコントロールできるということ。また、コントロールするために必要時に環境(人を含む)に向けて主張でき、その主張は尊重されているかということ、それとも環境の影響によりあきらめざるを得ないのか、あきらめから望むことを忘れてしまったのか等に着目し、ケアの必要性を考えるように説明をしている。看護計画立案と実施については、学生同士で実践し、プロセスレコードを用いて、自己の対人関係のとり方における振り返りの術を学んでいる。前半は教員の一方的な解説となるが、後半は学生のグループ力動をメインとしてすすめた。最後に全グループの発表と教員の助言で内容を補完した。</p>			
<p>授業の複数の成果物の提出については、時間のゆとりを持たせ、なおかつ他科目との重複と学生個人の能力も考慮し、既定の提出日に間に合わないと学生自身が判断し申請し個別に期限の延長も行った。</p>			

『大学院』

精神看護特論2・3、精神看護学演習Ⅰでは、対象理解(精神のアセスメントも含む)の幅の拡大と深化をはかるための概念枠組みやツールを紹介した。また、関係のきずなを深めるためにカールロジャーズの共感と非支持的療法の意味について深めるために文献の一部を抄読しながら、理解し考えを述べ合った。独自で学習するための本を複数紹介した。他に、治療技法としカウンセリングやブリーフセラピー、自己心理学を用いたセラピーなどを抄読も含めながら意見交換を行った。SSTについては主にビデオで実際を見ながらポイントをおさえた。精神看護特論Ⅰでは、精神保健福祉に関わる社会資源の現状と課題、家族のニーズを満たす地域精神医療サービスの課題やこれからについて、大学院生の経験知と文献を併せ持ってディスカッションを行った。

上級ケア実習のスーパーバイズでは対象理解やケア場面で生じたことについて、教員の持てる知識(精神分析の諸理論、トラウマ、愛着障害、自己心理学、間主観的アプローチ他)の視点から思いついたことや感じたことについてアドバイスをを行った。その際、なるべく学生を実践者として尊重することを大事にした。

4. 教育の成果

『学部』

3年生の授業内容の課題であるが、6領域のアセスメント方法がまじりあい、領域が変われば別個の仕方という認識になることは否めない。各領域罰ものではなく、重なり会ったところは多々あるかと思うが、そこまでいくには、学生の理解の統合が困難な様子が見えてくる。精神領域のアセスメントにおいては、情報の分類からの戸惑いはあるが、去年に比べて混乱は少ないように思う。対象理解のアセスメントは、ほとんどの学生がエリクソンの理論を用いるということは認識できているが、学生自身が患者理解のために有効に使用しているかどうかは、学生間でかなりの開きがある。また、精神のアセスメントについては、疾患枠組みを使用する学生は少なく、心理と精神機能がごっちゃになる学生がほとんどである。このところは、2年次の精神援助論からワークをいれて、学生自身がこまめに実施することが必要と考える。セルフケアの考え方においては、始めに自身のセルフケアについて考え、グループワークで討議し理解する機会を用いたが、いざ演習にはいと他領域の学習にかき消されるようにも思われ、グループワーク中に自身のセルフケアを書き込んだ用紙を見直す学生は見当たらなかった。また、2年次から学んできた対象理解の仕方についても目の前の演習の仕方であるHOW TOにとらわれ、学んだことを自ずと活用できる学生はほとんど見られない。しかし、強みや課題を見出す視点はほとんどの学生が持ち合わせており、情報やアセスメントしたことが部分としては考えられるが、情報を統合しケアとして今何が必要なのかを筋道立てて考えることは難しい段階と思われる。これらは実際の変化ある対象に関わりながら、対象の意思やニーズの強さや必要性を実感しながら、アセスメントしつつ実践する臨地実習への課題とも考える。

看護過程の評価は、80名中4名が59点以下だった。これら学生の内、看護過程のイロハのほとんどをつかめていないと判断した2名については個別にサポートを行う。

5. 今後の目標

『学部』

次年度の授業から精神障がい者の心理・精神状態の理解の仕方については、2年次から事例を用いてのワークを複数回重ね、3年でセルフケアアセスメントと情報の統合に重点を置いていく。

『大学院』

教員の興味関心をさらに深化・発展させ、学習素材を増やす。オープンダイアログを範疇に含めていく。長期的には卒業生を含めた事例検討会等を開催し、卒業生の技能向上にも携わりたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

<シラバス>

添付資料参照

<授業評価>

添付資料参照

<参加した研修会>

ブリーフセラピーに関する研修会 ライブ1日(5月)、日本精神保健看護学会学術集会 録画(6月)、日本精神分析的な心理療法フォーラム ライブ2日間(7月)に参加した。

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	林 文子
の			
<p>私は本学、奈良学園大学保健医療学部看護学科の教員であり、小児看護における授業、実習を担当している。着任後2年目の担当は次の内容である。小児看護援助論（看護2年必修）小児看護実習（看護3年必修）小児看護援助論演習（看護3年必修）統合看護学実習（4年必修）卒業研究（4年・必修）ターミナルケア論〔4年選択 全8回のうち2回担当〕。各授業のシラバスは大学 WEB ポータル上で本学学生並びに教職員に公開されている。また小児看護学概論（2年必修）小児疾病治療論（2年必修）については外部講師による授業科目となっているため、そのコーディネイトを担当し学生の質問を受け付けたり、授業の補助を行っている。</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>私の授業は、看護学部2・3年次の小児看護にかかわる科目が多いことである。2・3年次は、1年次に培った基礎看護学の知識と技術を土台とし、各専門領域の知識や技術を積み上げるよう学習を深め、看護に対する幅広い能力を身に付け、医療に対する倫理観を深めるべく学習することが重要である。小児看護学においては、学生にとって初めて学習する内容であり、対象となる子どもについて、少子高齢化、多様化する育児環境、子どもを取り巻く社会を検討していくにあたり、学生自身に子どもとの関わりを持つ体験が少ないことから、子どもの健全な成長発達と生活のイメージがわからない学生も多い。しかし小児医療の進歩や救命率の上昇、様々な養育環境により子どもの疾病構造、健康問題は変化しており、子どもと家族の健康的な生活を支える小児看護の社会的ニーズは高い。そのため小児看護学を学ぶ学生に対して、専門的知識と技術、倫理観について、学習を深めよう、大学の教育理念に基づき、真摯に教育に取り組まなければならないと考える。</p>			
私の学生との接し方：学生とは基本的に上から目線で接するのではなく、学生の意見をまずよ			
<p>担当している講義のうち小児看護援助論について述べる。この科目は子どもの健全な成長発達と生活を支える看護について様々な健康レベルにある子どもと家族の抱える課題をとらえ、看護援助の必要性を見出すアセスメントの基本的な理解が重要である。小児看護学概論で学習した子どもの基本的な発達と生活習慣、あるいは保健行動の促進に携わる小児看護の機能と役割についての基本的知識を土壌に、在宅療養や入院生活における小児の健康な生活のための看護を習得する科目である。授業では、療養生活が子どもと家族にもたらす影響を検討し、小児の生活援助の原則を①安全・安楽であること②病期・発達段階に応じた生活③家庭生活に近い環境を維持することとし、援助方法を学習していく。特にイメージしにくい子どもの特性や生活を踏まえて学習できるように、資料やレジメなどの要所で図を使って説明したり、援助場面の一部をDVDによる動画の活用を取り入れている。また乳児期から思春期まで小児の発達段階の幅は広いが、各授業の目的・内容に相応する発達段階の患児の例を用いて援助の実践方法を考え、各時期の課題をと捉えやすくしている。授業中に課題を出し、グループワークを一回、内容によっては2回取り入れ、検討できるようにしている。グループワーク中は教員が周り、話し合いの進行を助言したり、質問に答えたりして、学習が活発化されるようにしている。また学生の学び合いの良い点をクラス全体で共有したり、学生の疑問についても取り上げ、その授業内で解決できるようにしたり、次の授業の学習課題につなげるような工夫をしている。グループワークではなく個人の課題の取り組みは、クラスルームを活用し評価するなど、学生とのやり取りをできるだけ持てるようにしている。</p>			
<p>学生はイメージしにくかった子ども観と子どもへの援助に関心を持ちながら講義を聞き、グループワークの自由で活発な発言をしながら参加することができた。またグループワークでは他人の意見や考えを聞き、どのような援助が子どもと家族の支援になるのか考え、教員への質問ややり取りも交え、クラスでの共有やまとめなどによって、学習の成果を高めることができた。またその日の学習目標と課題について、グループワークを通して自らできたことやわかったと感じた経験は、次への学習につながっていた。</p>			
5. 今後の目標			
<p>今後、知識・考える力の定着を目指し、学生の肯定的なコメントだけではなく、グループワークでも力の発揮がうまくいかず学習成果が低い学生も存在するため、講義ごとに質問や自己評価を十分に行い、成果が低い学生への個別の働きかけをもっと行っていきたい。また確認テストの実施レポート課題、客観的な評価による学習成果の確認をしていきたい。学習内容が、ハンズ・オンではなくマインズ・オンになるよう、どのようにすれば、〔わかった〕と感じとり学習できるのか考え工夫していきたい。</p>			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

授業評価アンケートの一例

- ・ グループワークを通して有意義に理解を深めることができた。
 - ・ 自分の意見だけではなく人の違った意見をきくことはとても学習になった。
 - ・ 自分で考えることができた
 - ・ 知識を身に着けてもっと考えられるようしたい
 - ・ 講義の話をおきただけではなく、なぜ？と考えながら講義が聞けた。
 - ・ 問題を解いてその解説をききながら、また考えていくことでとても分かった
 - ・ これからも講義で問題（課題）を取り入れてほしい ・ 一番この授業が楽しかった
 - ・ レジメがわかりやすい
- などであった。

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	松村 あゆみ
1. 教育の責任			
<p>私は、本学において公衆衛生看護学を担当している。看護師課程、保健師課程における公衆衛生看護学の展開方法に関する科目を担当し、保健師養成における教育に力を注いでいる。また、労働者の職業に起因する疾病の予防と健康増進を行うための産業保健の分野においても授業を担当している。近年は少子高齢化の進展や単身世帯の増加など家族関係の変化に加え地域のつながりの希薄化、経済状態の低迷および雇用環境の変化、経済格差など公衆衛生・地域保健に求められるものが変化してきている。公衆衛生看護においては個人や集団としての特性を捉え、介入していくことが必要であり、人々の健康状態をより良い状態にすること、対象全体の健康増進と疾病予防を組織化された努力によって実現していく役割を担っている。そしてその役割を果たすため地域全体に共通した健康課題をアセスメントし地域の実情に合わせた活動を効果的に実践できるような講義や演習を心がけている。</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>学びの主体は学生であり、教え込むことをできるだけ避けようとしている。一人一人の思考を尊重し先に答えを出さず時間を変えて教育していきたい。学生の思考と援助・介入方法が自分の考えるものと異なることもあるが、学生の意図を尊重しその上で自分の考えやポイントを述べるようにしている。学習とは「多少とも持続的な変容を示すこと」であり、学生と向き合う時間を大切に「対話」を重視した「相互作用」とする教育を展開したいと考えている。</p>			
3. 教育の方法			
<p>1. 授業計画を毎回提示し、授業目的と目標を明示することで授業内容のイメージ化を図る。2. 保健師国家試験の出題基準にできるだけ対応し国家試験対策を図る。3. 授業教材は学生のニーズに合わせ、毎回工夫し興味関心をもたせる教材研究を行う。4. 様々な学びを捉えるためメールや教材配信ツールを活用し意見やコメントを収集し学生の学びを多角的にとらえる工夫をしている。5. 授業はプレゼン形式を中心にして、スライドは配布資料としても提示する。6. 教材によっては黒板等の使用も考える。7. 学生の思考を強化できるようにグループ学習を活用しグループでの自主性や責任感を育成する。8. 毎回の学習の成果を確認し、学生からの他者評価をもらい、改善をかけるようにする。</p>			
4. 教育の成果			
<p>教育の成果として、看護師、保健師を養成している大学であるため、国家試験に全員が合格しライセンスを取得することが重要である。また、公衆衛生看護学領域において保健師は行政保健師、産業保健師、学校で働く保健師や養護教諭があり、活躍の場が広がってきている。保健師課程選択の学生には保健師の魅力や公衆衛生看護学に興味をもつことができ、一人でも多くの保健師の就職を目指す。さらに産業保健への興味、関心を深め将来的に産業看護職としてキャリア形成が促進できるようにしていきたい。専門職の教育は専門職が行うべきであり、生涯にわたり活躍できる人材を育むことの意義が大きいため教員自身が学生のロールモデルになる必要がある。また、授業に関しては学生からの毎回のコメントをもらいそれに対するフィードバックを行い大学での学びを身近に感じてもらうとともに、教育の質の向上のために研鑽している。さらに学生への対話や相談にのることで学習への意欲の向上を図り、学習への動機づけにつながると考えている。</p>			
5. 今後の目標			
<p>1. 最新の公衆衛生看護学の知見を取り入れ、保健師国家試験の出題基準の内容と関連させる。2. 授業に導入するグループワークの改善を図る。3. 学生がより自主的に学習するような課題や教育方法を活用する。4. 学習目標を具体化し、習得内容の評価をタイムリーに行う。5. 授業で取り組んだ教育効果を測定し、教育の質を向上できる教材開発を行う。6. 他大学の教員との交流で授業改善をすすめる。7. 学生の思考を強化できるようにグループ学習を活用しグループでの自主性や責任感を育成する。8. 毎回の学習の成果を確認し、学生からの他者評価をもらい、改善をかけるようにする。</p>			
必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
<p>公衆衛生看護学援助論Ⅱ</p> <p>授業内容</p> <p>地域の健康水準や住民の生活の質を高めることを目標とした地区看護活動を理解する。地域住民の健康意識や認識を高め、行動変容に導く主要な方法として、健康教育の理念と目的、その展開方法および基礎的实践能力を習得する。また地区看護活動を展開する上で必須となる地区組織活動を理解し、グループの持つ力を意識的に活用し、組織化させていく基礎的方法を学ぶ。対象グループが主体的に問題解決をしていくために、グループ自身の力量を形成する支援方法について、具体的事例から学びを深める。</p> <p>授業目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の健康課題を把握し、健康教育の目的及び展開方法を理解する。 2. 演習を通して基本的な保健指導技術、健康教育を習得する。 3. 保健事業計画策定で重要なことは、計画の進行管理を地域住民および関係機関とともに継続、評価することであることを理解する。 			

回	内容	標準保健師講座①②
1	公衆衛生看護における機能と技術 対人支援の基本	②
2	公衆衛生看護活動に関する法令（高齢者・障害者・精神関係）	①
3	高齢者保健活動	③
4	精神保健活動	③
5	障害者（児）保健活動	③
6	保健指導で活用できる理論	②
7	保健指導の展開（保健指導・健康相談・健康診査）	②
8	保健指導の展開（保健指導・健康相談・健康診査）演習	
9	保健指導の展開（保健指導・健康相談・健康診査）演習	
10	地域組織活動の展開	②
11		
12	公衆衛生看護管理	②
13	健康教育の実際1：健康教育の企画立案・指導案作成	①
14	健康教育の実際2：健康教育の教材作成	
15	健康教育の実際3：健康教育の発表・評価	

公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）

授業内容

産業保健の理念や目的を理解し、労働安全衛生管理の法規や制度について学ぶ。産業の場における看護職の役割や機能について理解し保健指導や健康教育の意義について学習し産業保健活動の具体的な展開方法を理解する。また産業医と保健師の連携や家族への支援についても理解する。さらに職場環境と人の調和への支援についても考察する

授業目標

1. 産業保健の歴史と制度を理解し産業看護活動の展開方法を理解する
2. 産業保健における看護職の役割や機能を理解し健康支援のための活動を理解することができる
3. 労働衛生管理におけるしくみと支援方法を理解できる
4. 職業性疾患の原因と予防・看護について理解することができる
5. 職場におけるメンタルヘルス対策の現状と支援方法を理解できる

回	内容	標準保健師講座①③
1	産業保健の理念と目的 産業看護の歴史	③
2	産業保健における看護師の役割と機能	③
3	産業構造の変遷と産業保健制度・システム	③
4	労働衛生の現状	③
5	労働衛生管理のしくみ①（安全管理・職場巡視・労働衛生教育）	③
6	労働衛生管理のしくみ②（労働衛生5分野3管理・産業保健の対象）	③
7	労働衛生管理のしくみ③（産業保健計画・健康診断・健康相談・健康教育）	③
8	職業性疾患の原因と予防①（振動障害・騒音障害・放射線障害）	③・①
9	職業性疾患の原因と予防②（アスベスト・粉塵・化学物質）	③・①
10	職業性疾患の原因と予防③（頸項腕症候群・腰痛・VDT作業関連）・生活習慣病対策・過重労働対策	③
11	職場のメンタルヘルス①（メンタルヘルスの現状）	③
12	職場のメンタルヘルス②（メンタルヘルス対策と支援）	③
13	産業保健における関係職種・社会資源	③
14	家族や女性の支援	
15	産業保健師による講話（特定健診・生活習慣病対策・メンタルヘルス対策）	

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	山本 真樹子
1. 教育の責任			
<ul style="list-style-type: none"> ・母性看護援助論 ・母性看護援助論演習 ・母性看護学実習 ・統合看護学実習 ・助産診断・技術学Ⅱ ・助産診断・技術学Ⅲ ・助産診断・技術学演習Ⅰ ・助産診断・技術学演習Ⅱ ・ウイメンズヘルス学 ・地域母子保健 ・卒業研究Ⅱ ・助産診断・技術学実習Ⅰ ・助産診断・技術学実習Ⅱ ・助産診断・技術学実習Ⅲ ・助産診断・技術学実習Ⅳ 			
2. 教育の理念・目的			
<ul style="list-style-type: none"> ・自らの教育理念と目的 <p>看護職者は、生涯学び続けていく者である。専門的な能力を維持し、高めていくためにも自ら専門的な技術、知識を身につけていく努力が求められる。同時に高い倫理性が求められることと多様な背景の対象者と関わるため、幅広い教養と多角的な視点、自らを客観的に捉える能力が求められる。また、看護職者自身が心身ともに健康でなければ対象者に対してケアを行うことはできないと考えるため、自らの心身の健康維持・増進ができる日常生活を送ることも必要である。以上のような能力を養うことができること、特に母性分野であるために、男女問わずに、自身の健康観やセルフケア行動につながるができることを目的としている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・価値観・信念 <p>聖書の価値観を土台とし、成長を“信頼”することが大切であると考えている。</p> <p>また、母性看護学・助産学では特に、妊孕性に関わるため、男女問わずに、自らの体を大事にすることを伝えることも心がけている。</p>			
3. 教育の方法			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生との接し方 <p>教育も、女性が母親となっていく課程と同様に受容されていると感じることができることが大切だと考える。実際には難しい時もあるが、努力し、患者さんと同様にこちらから歩みよること、それぞれの学生の個性を尊重しつつ関わること、例えば、表現してもらおう機会を設け、思いを聴くなどを大事にしたいと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の工夫（授業の方法、内容等） <p>専門的な内容を伝えつつも自分自身や家族などに当てはめてみたり、関心が持てて、またイメージをしやすいように、実際の臨床での経験（プライバシー保護を守りながら、事例として、また私の失敗例、また今まで関わった学生さんのケアなどを含めて）伝えるようにしている。また、学生自身の生活スタイルを考慮し、食事内容や体を冷やさない等健康的な生活を送りたいと思えるような内容も含めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 <p>本学でのFD/SD研修会（6月4日、6月29日）</p> <p>日本私立看護系大学協会「第1回研究セミナー」参加予定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの専門分野の成長 <p>外部研修への参加</p> <p>①京都府助産師会2021年度第1回定期研修会「産科救急に立ち向かう」</p> <p>全国助産師協議会の研修</p> <p>①第46回全国研修「再考、助産師教育一専門職の成長を支える一」</p> <p>②6月20日2021年度 全国助産師教育協議会定時社員総会 研修</p> <p>③学生指導にも保健指導にも活用できる動機づけ面接（8月21日予定）</p>			

4. 教育の成果

・達成できたこと，できなかったこと（達成レベル）

達成できたこと：初年度で、zoomでの授業が大半で、準備がその都度、都度であったが、学生たちへの資料の提示や課題については、授業時間内に対応できたこと。

達成できなかったこと：看護過程について、個別の対応を演習内でできなかったこと。

・授業アンケートの結果

母性看護援助論演習については、すべての項目で全体の評価より高い点であったが、分担して行っていたため、私が担当した演習についてどうかという評価が分からない。助産学の授業についても分担であるため、私の担当分の評価はわからないが、全体の評価より低い点であったため、資料の見直しや伝え方を次年度の課題としたい。

5. 今後の目標

短期的目標：領域実習内で、看護過程の個別対応を行っていく。アンケート結果を踏まえ、次年度の授業内容を検討する。

長期的目標：内外の研修に参加し、自己研鑽を積んでいく。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	井上 昌子
1. 教育の責任			
<p>在宅看護学領域に所属し、専門科目の在宅看護援助論演習、在宅看護援助論を担当した。在宅看護実習、統合実習では、訪問看護ステーションや病院における実習で、学生の記録や技術的な指導、精神的なサポートを行った。今年度は、コロナ禍での臨地実習となり、感染対策を行いながら患者さんとコミュニケーションを取ることができた。看護過程では患者像を捉え、必要な看護のアセスメント、看護師の役割や多職種連携について指導を行った。役割卒業研究Ⅱでは、2名の学生に対し、卒業研究における分析や卒業論文執筆の指導を行った。また、アドバイザーとして学生9名に対して、履修登録の確認、適宜面談の実施、メールのやり取りや保護者懇談会後の保護者との懇談などを通じて学生生活の支援を行った。4年生の学生2名に対しては、模擬試験の結果を通して学習指導やモチベーションが低下しないように定期的に連絡を取り、受験をサポートした。</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>看護師として臨床で活用できるようにするために必要な知識や技術を身に付け、看護師国家試験を合格できる力をつけることを目標としている。地域で療養する方々の生活を支える看護を意識できるように授業を行い、学生が自ら気づき、主体的に学ぶことのできる授業となるように努めている。また、看護師の資質を育成するため、観察力や配慮・気遣いができるよう指導している。</p>			
3. 教育の方法			
<p>2021年度は、コロナウイルスが蔓延したため、ICTの活用と大学内での2種類の授業を実施した。Zoom授業では、各回ごとの目的を学生に示し、教科書、PowerPointのレジュメや、補助資料映像で学びを深め、復習できるようにした。看護過程の苦手な学生を対象に個別に指導を行い、理解できるように努めた。学内演習を通して、実際の患者を想像し援助ができるように、モデル人形を用いて学生の技術習得を支援した。</p> <p>学生とは、授業以外でも明るく親しみやすいように声をかけることを心掛けている。</p> <p>大学内で行われるFD研修、人権講演会には積極的に参加した。外部の研修では、所属学会が開催する研修や講演会、企業の開催する研究に関する研修に参加している。専門とする重症心身障害児（者）に対する支援に関する研究を行っている。</p>			
4. 教育の成果			
<p>在宅看護学援助論演習ではモデル人形を活用した授業を行い、学生が看護師役になることで、急変時の対応やアセスメント、報告、グループワークを通して気づくことが出来たと考える。今年度はGoogle Forms等で学生からの意見を聞き、授業に取り入れていきたい。</p>			
5. 今後の目標			
<p>長期的目標は、学生が実習時に看護過程や患者の関わりに対して困難感を抱かず、臨地で学べることを目指す。短期目標として、遠隔授業になった場合でも、質問できる体制を取り、理解できているか確認しながら進めていく。また事前課題に取り組んだうえで、授業に参加できるアクティブラーニングを目指す。グループワークや発表から、新たな視点や学びを得て、自分の考えを示すことができるように指導していきたい。</p>			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）</p>			
<p>外部の研修では、所属学会が開催する研修や講演会、企業の開催する研究に関する研修に参加している。</p>			

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	齋藤 英夫
1. 教育の責任			
<ul style="list-style-type: none"> ・成人看護援助論Ⅱ ・成人援助論演習 ・成人看護学実習Ⅰ ・成人看護学実習Ⅱ 			
2. 教育の理念・目的			
<ul style="list-style-type: none"> ・患者に寄り添える看護師の育成、看護師を目指す学生への手助けとなる教育を行う。 ・患者に向き合える看護と看護師を目指す学生の自発性を高めたい。 			
3. 教育の方法			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生に取り、質問をしやすい雰囲気を作る。 ・授業を通して得る知識を実習のみならず、将来の看護においても役立つような知識を追加する。 ・学会の積極的な参加を図る。 			
4. 教育の成果			
<ul style="list-style-type: none"> ・実習に役立つ、国試合格のための知識の取得、看護師の実務に役立つ、それぞれの目的は努力してはいるが達成には至らず。 ・コロナ渦において、学会の参加が思うように行えていないのが実情である。 			
5. 今後の目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・短期的には、現在の領域になったばかりのためにその内容の習熟を図る。 ・長期的には、2の自らの目標に即した授業や実習の実施を図る。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等） 			
Empty space for additional content			

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	関谷 まり
1. 教育の責任			
担当科目 学部 : 老年看護学概論、老年看護援助論、老年看護援助論演習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱ、統合実習、卒業研究Ⅱ			
2. 教育の理念・目的			
私の教育の理念・目的は、「学生が基礎能力や体験を踏まえ、生涯成長し続けるのに必要な実践力を身につけられる」教育をすることである。目的達成には、看護学を通し看護に必要な「観察力」「説明能力」「コミュニケーション力」「実践力」を一連の過程をサイクルとして身に着ける保健医療職者を育成することを行う。			
3. 教育の方法			
老年看護学を通して、看護に必要な「観察力」は担当科目である【老年看護学概論】、【老年看護援助論】において授業形式の方法の中で、高齢者特有の加現象、症状の特徴を踏まえて観察する視点や着目すべき状態を画像などを使用し具体的に説明しつつ理解を深め、学生が高齢者体験をすることで学ぶ気づきを育成している。【老年看護援助論演習】では高齢者の障害のある人の治療と援助について、高齢者の何を、どこを、いつ「観察」したらよいかをのべパー・シミュレーション(事例展開)の情報収集、アセスメントへとつなげ、問題解決能力を養う。グループ発表することで「説明能力」を身に着け看護過程の展開が実践できる基礎的知識を学ぶ。【老年看護学実習Ⅰ】では基礎的な知識を生かして、高齢者との効果的な「コミュニケーション」をできるようになり、対象理解が深まる実習指導を行う。【老年看護学実習Ⅱ】では受け持ち患者の看護過程の展開を行い、日常生活援助技術を個別性に合わせた方法で実践できるよう指導している。【統合実習】、【卒業研究Ⅱ】では、高齢社会にかかわる保健・医療・看護の視点から統合実習で看護実践力を学び、時代の発展と現状を学校での知識、臨床の場面の広い視野で卒業研究を探索的に行う。			
4. 教育の成果			
授業の成果として学習評価である試験は、老年看護学概論はリモートでの授業であったため、課題レポートでの評価を行った。老年看護学援助論や、老年看護学援助論演習は筆記試験であった。担当部分の得点が低値であったため、授業案の見直し課題とする。 老年看護学実習評価として今年度は老年看護学実習Ⅰは平均82.2点。老年看護学実習Ⅱは平均79.0点であった。実習の評価は評価表の基準に基づき点数化しているが、点数だけでは学生の実施した看護は見えない。そのため、行った看護とその成果である患者の反応を、実習最終カンファレンス資料として説明してもらい理解を確認している。			
5. 今後の目標			
短期目標の「講義」では、講義の感想を必ず次の講義の初めにフィードバックを行う。授業評価アンケート、実習アンケートの結果を受け止め、ポイントが低い評価項目に対して、今回はどのような工夫をするのか具体策を立て、授業案の変更を柔軟に行う。「実習」は実習場との協働関係が構築できている実習においては継続した連携を強化する。今後は初めての実習場でも協働関係が築けるようになるスキル、協働関係を構築する。 長期目標は、2022年度より、新カリキュラムに則った教育が展開されていく。領域の概念を柔軟に理解・対応し、新カリキュラムの教育内容を理解したうえで効果的な指導を行う。			
<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等） 			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	野口 寿美子
1. 教育の責任			
授業科目		内容	
基礎看護技術演習Ⅰ（1年生） 基礎看護学実習Ⅰ（1年生） 看護学概論（1年生） 看護コミュニケーション論（1年生） 看護倫理学（1年生） 基礎看護技術演習Ⅱ（2年生） ヘルスアセスメント（2年生） 看護過程演習（2年生） 基礎看護学実習Ⅱ（2年生） 卒業研究Ⅱ（4年生） 統合看護学実習（4年生）		基礎看護学領域内で、主に1～2年生を対象に看護の基礎知識・技術・思考過程を教授している。この中で基礎看護技術演習Ⅰ・Ⅱでは他教員とオムニバスで授業を展開し、担当単元の講義を任されている。今年度は新たにヘルスアセスメントも担当となり同様に展開した。授業においては患者や家族、その人に可能な限り最良で、最善のケアを提供するためにどのような計画、介入援助が望ましいかを考えて、計画、行動の一連の過程を思考できるよう支援している。他教員の単元においては授業をサポートし、演習では学生のレポートの添削、学生へのアドバイスをを行っている。演習において2～3グループ（10名程度）を担当し、学生の演習の直接指導を行っている。基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱでは1グループ（4～5名）、今年度からは基礎看護学領域でも統合看護学実習で2名の学生を担当し、学生個々のテーマに応じた実習先の開拓を始め、3か所の施設で展開中。実習指導においては実習展開が円滑に進み個々の学生が課せられた目標を達成できるように直接支援すること、学生が成長できるような促進剤となること、実習場所（病院、施設）を学習環境として整えることを行っている。特に1、2年生を担当する第1段階、第2段階の実習は原則実習場に常駐し、目の前の現象を教材化すること、学生の思考過程を援助することを丁寧に行わなくてはならない。	
2. 教育の理念・目的			
<p>学生の入学動機には決して明確に看護職を目指して入学してきたとは限らない現状がある。そうであっても看護を学ぶ中で看護の素晴らしさに気づき、看護職として自身の中で目指すことが明確になるように導くこと、看護の素晴らしさを看護経験を通して実感できるよう伝える役割があると考えている。卒業後は国家資格をもつ人間として命の現場で働かなくてはならないため、自分の知識を目の前の患者に適応させ、どのように看護を実施するのかを常に考え行動することが求められる。そのためには根拠となる知識と知識を獲得する力、知識を生かす力、目の前の患者に何が最善なのかを考える力は必須である。また、考える際の視点には「患者のために最も望ましいことは何か」という問いを常に持つことが大切である。そのように自ら考え探求し実践していける看護職を育てて行きたいと考えている。</p>			
3. 教育の方法			
いつも行っていること、重要視していることなど			
<p>事前課題、自己課題の提示</p> <p>小テストの実施（授業内でのポイント確認）</p> <p>新聞記事等の紹介、身近な事例を取り上げている</p> <p>配布資料をダウンロードできるようにしている</p> <p>映像を取り入れ視覚的に理解できるようにしている</p> <p>授業開始・終了時間を厳守している</p> <p>授業内で授業の感想を書いている</p> <p>学業に関わらず学生の相談に乗っている</p> <p>最近の知見や研究成果を紹介するようにしている</p>			

4. 教育の成果

授業毎に担当した単元の簡単な授業アンケートを取っておりそこでは好意的な回答を得ている。しかし、オムニバス授業であるため、科目全体での評価は得ていない。それが今後の課題と考えている。演習及び実習では、知識をどのように活用していくのか、必要な知識は何かを見いだせるように繰り返し問いかけるようにしており、実習を重ねるごとに学生自身の気づきは増えており、学んでいる実感と同時に、学生自身の学習の不足を痛感したという意見を得ている。

5. 今後の目標

昨年同様に短期目標では、いかに飽きさせず、楽しく学べ、考える授業にしていくかを目指したい。
長期目標では、教授方法、ICTの知識習得等、学生の学ぶ意欲を引き出せる教員なれるようスキルを身につけたい。また、現在は科目の一部分を担当する力しかなく、1科目を教授できる能力を身につけたいと考えている。

- 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	堀井 有紗
1. 教育の責任			
<p>【2021年度 前期 の担当授業科目(オムニバス)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 母性看護援助論演習 助産診断・技術学Ⅰ 助産診断・技術学演習Ⅱ 卒業研究Ⅱ 母性看護学実習 統合看護学実習 助産学実習 			
2. 教育の理念・目的			
<p>母性看護学・助産学の楽しさを伝え、学生が主体的に学ぶことにより、変化する社会に対応できる広い視野や創造性を持ち、誠実さ・協調性・実践力を持った社会に貢献できる看護師・助産師を育成すること。</p>			
3. 教育の方法			
<p>【学生との接し方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段から話しやすい雰囲気を作り、学生が質問や疑問を投げかけやすい教員であるよう心掛けている。 ・褒めて伸ばすことを意識し、学生の行動や結果を承認するよう心掛けている。 <p>【授業の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の学習目標を提示し、ゴールを明示するようにしている。 ・発問することで学生自身が考えることを促し、その後 自分の考えを発表できる機会を設けるようにしている。 ・グループディスカッションの時間をつくり、他者の意見や考えをきいたり、他者と協力して学習する機会を設けるようにしている。 ・効果的な学習となるよう、ARCSモデルを取り入れて授業を計画している。 <p>【FD/SD研修会への参加】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学主催のFD/SD研修会に参加。 <p>【専門分野の成長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本助産学会学術集會に参加。 ・産前産後サポート研究会に参加（6回/年）。 			
4. 教育の成果			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業や質問に対する回答など、分かりやすかったという反応と、アセスメントや助産診断を行う授業に対しては少し難しかったという反応があった。 			
5. 今後の目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインで行う学習と対面形式での学習を効果的に計画することで学習効率を上げる。 ・主体的な学びを引き出せるような授業や関りを行う。 ・引き続き感染拡大防止対策を実施し、安全な授業を計画する。 			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	松居 典子
1. 教育の責任			
<p>2021年度担当科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母性看護援助論 ・母性看護援助論演習 ・母性看護学実習 ・統合看護学実習 ・ウイメンズヘルス学 ・助産診断・技術学Ⅲ ・助産診断・技術学演習Ⅰ、Ⅱ ・助産診断・技術学実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ ・卒業研究Ⅱ <p>2021年度担当WG</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策WG 			
2. 教育の理念・目的			
<p>学生自身が興味を持ち主体的に学べるように授業をすすめていきたいと考えている。</p> <p>授業や授業資料から学習内容について学生が興味を持ちさらに、自己学習を深めていける機会となるようにしていきたい。</p> <p>学生に問題定義できるように、各種情報に興味と問題意識を持ち、自身も学習を深めたい。</p> <p>また、学生相互の意見や考え方も大切にすることで、より学びが深められると考えている。</p>			
3. 教育の方法			
<p>どの学生にも不利益のないようにすること、公平に接することなどを念頭に学生と接するように努めている。特にコロナ渦では、やむを得ずオンライン授業となることもあるが、そのような状況が学生の不利益とならないように、オンラインでも同等の学習成果が得られるように工夫し、授業計画を行っていききたい。講義形式の授業では、プレゼンテーションのスライドを準備し学生自身で書き込みをしてもらうなどし、授業内容を確認しながら進めている。また、学生自身で考え、学びを深めてもらうためにグループ学習も適宜取り入れている。オンライン形式の授業では、事前に資料を提示して学生が準備して授業に参加できるようにしている。グーグルクラスルームやメールなどで適宜質問を受け、質問に対しては、学生の学びの妨げにならないようできるだけ早く返答するように心がけている。演習の授業については、正しい方法、現実に則した方法で演習をするように心がけ、学生の学びを混乱させないように注意している。実習では、学生に多くの学びの場が得られるようにすること、学生と実習指導者がスムーズにコミュニケーションできるようにすることを心がけている。また、実習場面で、より学習を広げ、深めてもらえるような指導を行えるようにと考えている。FD/SDに関する研修会については学内・学外で行われるものに参加するように努めている。母性分野の研修会についても、昨年以降オンラインで多くの研修会が実施されているので、できるだけ参加し、いろいろな知識を得るように努力している。</p>			
4. 教育の成果			
<p>授業時に得た学生のコメントなどから、授業内容について、興味を深め理解を得られていると考えられる。しかし、学習成果が十分でないものもあり、授業計画、資料、説明など改善をしていきたい。また、オンライン授業については、不慣れな点もあり十分にオンラインの場が活用できていない点もあるので、さらにオンライン授業の方法や進め方について学習し、改善していきたい。</p>			
5. 今後の目標			
<p>オンライン授業については、不慣れな点も多いため、さらにスムーズな授業進行になるように改善していきたい。今後、より学習の興味や理解につながる授業になるように学習方法や授業資料、説明内容などを改善していきたい。</p>			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	松浦 尚子
1. 教育の責任			
<p>私は本学において、保健医療学部看護学科で基礎看護学領域を担当している。基礎看護学は、入学して初めて学ぶ看護の授業である。講義では1年生の「基礎看護技術演習Ⅰ」、2年生の「基礎看護技術演習Ⅱ」、「基礎演習Ⅰ」を担当し、実習では1年生の「基礎看護学実習Ⅰ」、2年生の「基礎看護学実習Ⅱ」を担当している。その他に、「公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）」を担当している。</p> <p>校務分掌では学生生活を担当している。</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 看護が楽しいと思えるように、授業展開、実習を工夫する。 2) 学生の個々の能力を引き出せるよう工夫する。 3) 主体的な学修ができる学生を育てる。 			
3. 教育の方法			
<p>上述の教育理念を達成するため、講義、演習では、すぐに答えを伝えるのではなく、「なぜ？」と問いかけ考えさせるようにしている。学生はこれまでの教育で、教えてもらうことが当たり前となっているため、「教えてくれない」と訴えられることもあるが、「なぜ？」と問いかけることにより、看護の本質を考えられるようになり、その考えたことを自分の言葉で伝えることにより、考える力、相手に伝える力が育っていく。さらに、「なぜ？」と考えていくことにより、主体的な学修へと導けると考え実践している。そして、看護をするうえでコミュニケーション力は欠かせないため、私自身が学生に積極的に挨拶を行い、話しかけている。</p> <p>実習では、「なぜ？」と問いかけながらも、その時にしか学べないことが多々あるため、すぐに答えが導き出せるように工夫し、看護をする楽しさを実感できるようにしている。</p> <p>普段から、学生のモデルナースとなれるよう、服装、態度、言葉使い等を考え行動している。</p>			
4. 教育の成果			
<p>授業評価では、概ね良好な評価であったが、資料については見えにくいものがあったという回答があったため、工夫していく。</p> <p>1年生は入学時は緊張もあったが、前期の講義、学内実習、後期の週に1度の演習を通し、看護の本質をみようとしていることが言動からみられた。</p> <p>2年生は臨地実習後、「次はもっと勉強して患者さんのために看護をしたい」という言葉を担当していた複数の学生から聴くことが出来た。</p>			
5. 今後の目標			
<p>短期目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 授業研究を行う時間を確保し、学生の学びが深まる授業にする。 2) 学生の観察と、学生とのコミュニケーションから、学生の変化に気づき、思いを知る。 <p>長期目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 広い視野をもって学ぶ。 2) 専門性を深める。 			
<p>・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）</p>			

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	溝口 みちる
1. 教育の責任			
<p>看護専門学校の専任教員を経験後、奈良学園大学保健医療学部 看護学科では助手を経て現在、助教として成人看護学領域を専門とし看護学科の養成に携わっている。オムニバスで、昨年度より「成人看護学援助論Ⅱ」、本年度より「成人看護援助論演習」を担当している。実習は、「成人看護学実習Ⅰ（急性期）・Ⅱ（慢性期）」と「統合看護学実習」を担当している。また、卒業研究も担当している。成人看護学援助論Ⅱで学んだことを成人看護援助論演習で事例をもとに想起させ、看護の実際に近づけるような工夫をしている。特に、病気は今、その時に起こったものではなく、これまで対象者がどのような生活を送ってきたのかというところにその要因や誘因が隠れていることを強調している。そのうえで、対象者の方の健康障害がどのように起こったのか、行われている治療やその効果はどうか、どのように認識しているのか、今後どのような生活へと戻るのか、学生が「わかった」と言えるよう看護の考え方を引き出している。成人看護学実習Ⅰ（急性期）では、麻酔による影響や手術による侵襲が、心身へどのように影響するのかを考え、術前・術中・術後の看護過程を展開している。また、合併症を早期発見し予防に努める看護が必要となるが、その場面をどのようにアセスメントするのが求められる。成人看護学実習Ⅱ（慢性期）では、入院前の生活と比較してどう変化したのかを、発達段階と疾患、生活からアセスメントすることが求められる。ここでも、統合した捉え方ができるよう施すことが求められる。対象者がこの先どうしていきたくいのかを一緒に考えプランニングでき、自身が行った看護により、学生個々のもっている部分を引き出している。また、対象者を支える人（家族など）の存在も重要であり、人と人とのつながりや絆を大切に考えることができる看護を目指している。統合看護学実習では、複数対象者を受け持ち、優先順位を考え看護を行うこと、看護管理やメンバーとしての役割など、実際の現場で体験する。また、チーム医療、多職種連携についても、看護師の役割がいかに重要かということをおこの実習で学び、より看護師として意識できるよう実習としている。卒業研究では、実際に行った実習と絡ませ、学生が関心のあるテーマについて論文作成できるよう関わる。</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>私は「寄り添う看護」を大事にしている。「寄り添う看護」という言葉は大きいですが、対象者の方に一番近くで必要とする看護がしたい。また、病いと向き合いながらもその人らしい姿で生活を送ることができるような看護を目指している。これが私の看護観でもある。看護を学ぶためには、人を理解し観察する力を身につける必要がある。そうすることで、「何かおかしい」といった変化を察知すると「何とかしたい」という思いが芽生え、「その人のために看護を実行する」ことに繋がるのではないかと考えるからである。また、対象者の方が自ら持てる力を発揮できるように関わることが看護であり、その結果、対象者自身でコントロールすることで、より健康な生活を送ることにつながるのではないかと考えている。学生には、このような看護が実践できるよう身につけてほしいと考えている。現代のコミュニケーションツールの中心がSNSとなっているなか、それを頼ることも多くなっているが、自身が体験していない他人の言葉に惑わされたり、それを信じて実行することも少なくない。自身が生活するうえで人と人とのつながり、そのなかでさまざまな体験をすることが重要であると考えている。それは、成功したこと、失敗したことなど何でも構わない。その経験から思うことや考えることは山ほどあるからである。大切なのは、経験や体験から自身の思いや考えを伝えることであり、それがいずれ看護に活かされると考える。また、看護はひとりで行うものではなく、チームとして自身の立場を考えなければならない。そのためには、協調性も必要である。以上のように、学生自身がさまざまな経験や体験を経て、人として成長することが、良い看護にもつながると考えている。</p>			
3. 教育の方法			
<p>教育の理念で挙げている「自身の思いや考えを伝えること」や「協調性」を発揮できるよう、私が講義で大切にしているものは、意見や発言ができるグループワークである。グループワークをするだけでなく、事前学習（当日の授業内容のパワーポイント）を提示したうえで、グループワークに臨むことを前提としている。事前学習は、紙上事例を提示している。紙上事例の工夫としては、著名人の疾病や実際の体験談の動画、看護場面のイラストなどを活用し、ある程度想像ができる事例内容とすることで、学生が興味をもちながら考え、発問する環境につながることをねらいである。このような紙上事例を活用することで、グループワークを通して問題解決できる力を身につけることができる。グループワークで発表してもらった後、私から解説を行うが、私の考えた看護、その時々で状況は変化し、それに合わせた看護が必要であることの重要さも同時に伝えている。特に、看護には正解や不正解といった考え方はないことを学生が気づける場面も作っている。学生個々に応じて考えが異なること、多種多様な考え方があることを説明している。そうすることで、さらに学生からの発言や意見が増え、学生も自信がつく。講義の終了後は、振り返りを記載する。わかったことや学んだこと、グループワークでどのような討論を行ったのかを提出してもらう。</p>			

4. 教育の成果

ひとりで事前学習をするうえで学べなかったことが、グループワークを行ったことで新たな学びが生まれたり、学びが深まったといった声があがった。グループワークで分かったこと（大腸がんの看護の講義後、学生の学びの抜粋）・ただ家で生活することだけを考えずに、たとえば温泉に行くときにはストーマが気になるだろうな、という話があった。自分だけや家族の前では見せることはできても、他人に見せるとなると理解されなければ目線が気になると思う。温泉内ではタオルで隠すなどして対処した方がいいかなという話になった。本年度はリモートでの講義であったため、学生の表情や言動が上手くとらえられず、グループワークへの関わりが不足していたことが反省点である。・ストーマを造設することは、これまで普通に生活していたことから、制限がかかったり、ボディイメージの変化により患者さんの受け止め方についてさまざまな視点から考えることがひつようと理解した。グループワークを通して、社会保障制度について、身体障害者福祉手帳の交付や社会保障サービスを受けることができるということが事前学習で取り組めていなかったのがわかることができた。食事の際、消化のことも考え食事内容だけでなく、咀嚼のところから気をつけることが大切だということがわかった。

5. 今後の目標

短期的な目標：紙上事例を取り上げた授業内容としているが、より臨場感を出し、学生が想像できるできるように工夫する。またグループワークでは、学習を深めたうえで、問題解決に向けてテーマにそった討論が積極的に全員参加できるように工夫し、学生参加の講義ができる。
長期的な目標：看護師としての倫理観、思考過程を身に着けることができるよう、シミュレーション等でより臨場感のある場面を想定した看護過程と演習ができ、看護観を明確にできるよう臨床現場での指導ができる。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

webシラバス参照

ティーディングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	山崎 陸世
1. 教育の責任			
<p>①精神看護学領域の授業（「精神看護学援助論」の一部、「精神看護学援助論演習」の一部）</p> <p>②精神看護学実習、統合看護学実習、成人看護学実習Ⅱ（慢性）実習の指導</p> <p>③公欠した学生の補習実習</p> <p>④実習施設、臨床指導者との調整⑤施設主催の実習指導者会に出席（振り返りを述べる）</p> <p>⑥授業・演習・臨地実習での物品の購入・管理、教材開発</p> <p>⑦看護過程の事例作成</p> <p>⑧卒業研究(2名)</p> <p>⑨国家試験の勉強のサポート(2名)</p> <p>⑩チューター(8名)</p>			
2. 教育の理念・目的			
<p>①自分の考える教育理念は「学生の意志と能力を尊重した教育を実施することを基盤として、多様な価値観や豊かな人間性を養い、様々な看護の場において柔軟に対応はでき、看護の発展に貢献できる人材を育成する」ことである。よって、教育の目的は「看護の対象者の意思を尊重し、その意思が実現できるよう支援することできる。また自己を振り返り主体的に学び続けられる看護師を育成する」そして「学生の看護観を育み、卒業時には自己の看護観を明確にして発展させることができる」ことである。</p> <p>②価値観・信念は「学生とともに患者を見つめ、学生との対話のなかで意味づけをする。また、患者との関わりを通して関係性や看護の喜びが実感できるように後押しをしたい」と考えている。</p>			
3. 教育の方法			
<p>1.①②について「援助論演習」と「臨地実習」の連動を意識した。授業では精神疾患を有する患者（急性期と慢性期）の事例を通して、精神症状と生きづらさをイメージできるよう、またグループワークの時点で、看護過程の展開が問題解決思考型ではなく、患者の強みやリカバリーの視点で考える重要性を説明した。それを個人ワークで各自どのような個性を見出せることができたか、一人ひとり看護過程を添削して、できるだけ手渡しして説明しながら返却した。本年度の臨地実習は1週間しか行けなかった学生が多かったため（1日しか行けない学生グループもあった）、総合アセスメントと看護の方向性を重視して、最終日に一人ひとり対話する時間を設けて、「この実習をどう感じたか、精神看護をどのように感じたか」を振り返るようにした。しかし、実習期間が1週間の学生と2週間の学生の学びの内容を比較したとき、2週間の学生の方が、自己の傾向の振り返りが深く、それが患者の関係や看護にどのような影響を与えているかを考えることができた印象を持った（そのため臨地の後に学内実習のある学生については、何が課題として残っているか明確にして学内実習に臨ませた）。</p> <p>教育に関するFD/SD活動は2020年10月7日に「教育評価」梶田叡一先生の講演、2021年3月10日「保健医療領域の臨床研究」西山知佳先生の講演に参加した。</p> <p>本年度は、精神看護学領域に変わった年であること、コロナ禍の中で学生がどのような学びができるのか（学びの保障に）必死なあまり、専門性について自己研鑽に取り組む余裕がなく成長することができなかった。</p>			
4. 教育の成果			
<p>1.①②当該科目（授業・臨地実習）において、学生は到達委目標に達して単位修得することができた。しかし、臨地実習は新型コロナウイルス感染症の影響により、2つのグループが臨地が1日のみとなり、1つのグループの学生が全く臨地に行けなかった。1.③卒業研究においては学生が探求したい内容についてまとめることができた。1.④国家試験(2名)については、最初の模試は必修30点台、一般・状況130点台であった。学生と問題・解答の振り返りの方法と学習の仕方について何回か回数を重ねて学習を繰り返し、徐々に独り立ちをさせた。そのあとは学習状況の確認と本人の学習の継続により合格することができた。</p>			
5. 今後の目標			
<p>短期目標：①本年度の精神看護学実習の学生・教員の振り返りを文章化する（やまと精神医療センター・訪問看護ステーションいしづえ）。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で実習施設など変更を要した。本年度実施した授業や実習内容を振り返ることで、新カリキュラム編成に向け、コロナなどの非常事態においても柔軟に対応できるカリキュラムを構築できるようにしたい。②本学の新カリキュラムの内容を理解して、精神看護学領域の科目としてどのような内容を入れていくか検討していく。</p> <p>長期的目標：①精神看護学の専門性を向上していきたい。②教育学の教員もしくは臨床の看護師と看護学生を対象とした共同研究をする。</p>			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

本年度は、自ら組み立てをして教育を実施した一つとして「公欠の学生に対する補習実習」を挙げる。添付資料①②を示す。